とか白石とか云ふ大家もありましたからナ、併し書に至つては殆んど前後に餘り見ない、仁齋などの書いたものは學者として見られる位のもので書家としては見られるものでない、それから皆川絹齋、貫名海屋、賴春水とか云ふ書家もありますけれども一向ドウモ見られない、書生の俗書ですテ、山陽も中々字を能く書きました、恐らく山陽は經書歴史家として著名と云ふよりは寧ろ詩書家の方でありませう。

米菴と菱湖の優劣に付いては既に先人の評もある通りで、書論其他諸學に通曉して居つて子弟を敎育することは米菴の方が遙かに長じて居る、米菴の家に蘭臺寛齋と代々學者でありますから御師匠さんとして講釋を聞くには米菴の方が宜ろしい、米家墨談とか米家書訣とか云ふものもありまして大名旗本などは大概米菴の門人になりまして盛んに門戸を張つて居りました、菱湖の方は零落の人で世渡りの仕方は米菴の樣には行かなかつた、併し字は米菴より能く書きます、米菴は惜い事にはモト鈍筆ですから菱湖程筆は動かない、アノ人の書と云ふものは癖が多くて習つても仕樣がない、菱湖の方は變り易いから今日小學校の子供に習はしても間違ひはない。



元祿の徂徠時分には一体に文事が進んで來たときであるが其際は文徵明の風を北島雪山より廣澤に傳へて流行しました、文徵明は支那では餘程有名の人ですけれども徵明の書と云ふものは極く癖のある

字でありますからァー云ふ書が流行してから一時書風が悪くなりました。

學校で一週に二時間か三時間か書を習はした所が迚も書を美術的に發達さすることは出來ない、石版や何かに書かして居つて土臺教へる人に筆法も何もないのですから專門的に遣る樣な譯には行かない書でもさうです、美術學校などに入れて規則づくめで順序に引立つて行つたのでは通常の書は出來ませうが優れて古人と爭ふ樣なものは容易に出來まいと思ひます。



# 益田克德君

## 茶

私の庭を嗜むのは矢張茶から出たので、一体此茶の湯と云ふものは言葉では茶の湯と云ふ丈けでございますが、大變意義の廣いもので す、マア建築のことから庭のことから鑑識儀式と云ふものがありまして、遊び事の樣なものですけれども幾らか是が學術的に爲つて居るのは大不思議であらうと思ふのです。

ソコデ茶はドンナものかと云つたならば禪味と云ふものなんですね、其禪味と云ふものはドウカと云へば曰く言ひ能はずと云ふて宜しい、

私よりはマダ禪味と云ふことに付いては能く知つて居る人があるから禪味と云ふことに付ては辯解するには及ばぬのですが元來茶と云ふものは禪と與に起つて來たもので詰り足利の世に爲つて禪家の坊主に大變豪傑が現はれて來て、朝廷も歸依せらるれば又將軍家も之に歸依したことは歷史上明らかの話で政治上にも關與した位の勢に爲つて來のです、ソコデ凡ての事柄が殘らず禪味を帶びて來た取り分けて美術上の方に此禪味と云ふものが這入つて來て殆んど藤原家から續いて來た保元平治邊りの日本の美術は一變したらうと思ふ、其著るしい證據の替つて居るのは繪畫なんどですね、大和繪は大に勢力を落して牧溪とか雪舟とか云ふ風が流行して來ると云ふ樣な譯



で此茶と云ふものは矢張り其即ち禪家の法に據つて珠光とか紹鷗に次で利休が之を拵へたのです、それであるから茶席に通よう路次に這入るときは即ち世塵を離れて仕舞つて清淨無垢の人間に爲つて這入る、夫からマア、手洗を遣ふ、ツクバイに向つて手を洗ふなどゝ云ふのは心の垢を落して席に入ると云ふ旨意であります、茶の湯一番眞と云ふものは何であるかと云ふと床の間に飾る物は大和尙の偈とか、良い言葉を擇んらで書いたものを其儘掛けて遣ると云ふのが元なんですから餘程マアわびた寂びしい風流の極くマア何とも云へませぬ幽邃の遊びなんですけれども併しながら段々其横道から考へて見ると云ふと極く親しい朋友と親密な交りをするには一番私は

好い法であらうと思います。

それで亭主と爲つて客を接待するにも茶の湯程完備したものはない、先づ刻限と云ふものも極く正しく仕來つて居る、それから又亭主が客を迎へるにも敢て其珍味佳肴を以て鄭重に饗なすと云ふのが趣意ではない、勿論禪家の法です、併ながら縱令鯉一尾捕つて來たからと云つて朋友を呼で料理つて喰はせやうと云ふ心を盡す所が大變の馳走になると云ふ話なんです、又給仕をするにも貴賤の別なく一室に居つて自分が給仕して喰はせるから交りを篤くする上から言つたならば誠に親切なる心持を以て取扱つた方です。

それから又座敷に諸々の器物を飾り付ける、是はドコノ國でも飾り



付けに付て一の學問を爲して居る國はなからうと思ふのです、所が此茶では中々研究したもので物を飾り付けるに付て色々カネワリだとか何とか云つて法則があつて誰が遣つても其法則通りに從つて遣れば宜いのです。

それから建築の方でもキハチとか寸法とか云ふものがチヤンと拵へ出してある、マア迚もサイエンスと云ふ程ではありますまいけれども一般に應用する所の法則は中々意を用ひたものです、建築の中には庭も含まれて居るでせう、それからマア鑑識それから手前、順序と云ふものをスツカリ習ひ覺へると云ふことは中々混雜したものです、それから以上は斯う云ふ趣向にして斯う變化して行くと云ふこ

とは殆んど詩を作り歌を詠ずると同じもので客を饗てなす上に於て色々變化して行く工合と云ふものは規則外のもので是は其人の心に存するので以心傳心不立文字と云つて宜しい。

デ中には茶の湯を以て大變奢りに長ずるもので身代や何かを危めるものであるからと云つて反對するものもありませうが、それは俗人がコイツを遣るときには見へを飾つて人に自慢すると云ふ風なものもありますが、是等は本當の禪味の方から行かず之を奢侈の道具に遣つて居るからで迚も達摩以上の茶と云ふものは容易に分かるものではないでせう、ソコデ茶に這入るのは或は儀式が大變好いから娘や何かに稽古をさせて置いたならば疊障りも宜くなり行儀も宜くな



るだらうと云ふ所から這入り込む人もありますし、中には席が少さくて面白いと云つて席を拵らへ席が出來た上は一通り何か備へ付けて見やうと云ふ所から這入る人もあります、又中には會席が美味い、己は食物が好きだからと云ふ所から這入る人もある、所謂小乘から大乘に這入る樣な話でせうけれども宗匠の居る所では娘や何かゞ大變茶を遣つて藝者なども宗匠の所に行つて茶を覺へてサア今度宴會か何かの席に行つて れ給仕をするに何と云ひますか張肱で膳を持つて行つて餘程優美の姿をなくなしたと云ふ樣な可笑しな話がありまし、茶に付ては隨分珍談もドッサリあるものでありまして昔から珍談が山の如くありまして其珍談を一々御話しても中々腹を抱へるこ

とがあるものですからネ、詰り云ふと茶は極く隱逸な趣向のものであるのですけれども流石に足利將軍家より秀吉時代には諸大名は悉く遣つたものですから流行して終に凡べて金を持つて居る者は茶道具を持たねばならぬ樣に爲つた、併し今日迄兵火に罹つたり通常の火災の爲めに無くなつたものも夥しい數でありませうが失れ是れに拘はらず今日尙ほ支那朝鮮邊りの器物を日本に存して東洋の一奇觀を現はして居るのです、それで一般の美術繪畫なぞも多くは此茶の湯と云ふものと密接の關係を持つて居るのであります、私なぞの茶は何を遣つても失敗だらけである者ですから遂に茶の湯に變じたのです、隱逸な極寂びしい詫びた所が好きで這入つたものには相違



ありませぬ、併ながら這入つて見ると感服せざるを得ない、極く狹い言葉でありながら社交上の手段も這入つて居れば又庭園建築のことも籠つて居れば凡べての美術上の事柄を含蓄して居ると云ふことは決して言を誇大にして話すのでなくして全く事實の上に於てさうであらうと私は思ふのであります、

## 庭園

庭は繪を畫くのと同じ樣なもので眞の山水を寫すのですけれども場所に應じて寫さなければなりませぬ、京都の樣な山水の景色に富んで居る所では其山水の景色迄小さく寫したのではつまらぬ話です、却つて其丸物の庭を拵へて下に引砂をして直ぐ塀の外には比叡山と

か或はグルリの山が見べる樣に拵へなければなりませぬから京都の樣な所は庭の拵へ方が違います、東京の樣な山水に遠ざかつて居ります所では山水を見せる趣向を廻さなければなりませぬ、眼界の小さい庭では奇石名石なぞの愛すべきものを置くこともあります、又廣い庭で頓着なく眼界の變化を眸に收めるときには水も見せると云ふ趣向も取らなければなりませぬ、場所に應じ地勢に應じて拵へるものですから……其家にも依りまして眞の庭を拵へるとか行の庭を拵へるとか草の庭を拵へるとか云ふ話もある、草の庭と云ふのは草原みた樣なものを拵へて樂しむと云ふことであります、ソコには田舍家でも建つて置けば向きます、併し大厦高樓の立つて居る所へ



草庭を構へたのでは嵌りませぬ。

それから又此庭と云ふものは眞の山水を寫すのではありますけれども悉く眞を寫して寫眞の樣に爲つたのでは面白くない、其位なれば油繪を塀に張附けて置く方が良いと云ふ話もある、矢張り繪と同じで眞の山水と違つて居つて幾らか眞の山水と同じ心持を見せるのが目的で、それから以上は是ぞ云ふ可らざるもので人々の嗜好にも依りますから高尚なる所の心に一任するより外に仕樣はないのです。

# 渡邊昇子

## 武者修行

マアどうも地方を歩行くのは餘程身體の爲めに好い樣だ、私は四國には所々ゆきましたけれども全体を見たことはないから今度は殘らず四國を回つて夫から山陰の方に行かうと思いましたけれども九州地方より是非來んかと云ふ話が武德會で起つたものであるから山陰に回らずスグ九州に行くことになりました、夫に山陰は未だ鐵道が開けて居らぬから子、ドウも人間と云ふやつは困つたもんで鐵道が出來きて見ると船で行くのでさへも不便に思ふていかぬ、昔私等が



歩行く時分は誓古道具から着換迄皆な肩に荷負つて歩行るいたものだ、夫から思へば今は樂なもので丸で鐵道武者修行サハ、、、今度は四國九州山陽京攝伊勢名古屋と十五府縣廻つた昔ならドうしても二年は掛る、併し趣味の上から言へば無論今より昔の方が趣味がある、今の若者は八里歩行かうと云ふても厭がる、現に德島などでも困つたことがあつた、一体德島と云ふ所は聞いたより武術の流行る所ぢやが彼所には野士と稱へるものがあつて昔から郡村は餘程盛んで却つて城下よりは田舍の方が流行つたさうだが今度なども郡村からアッチからも來て吳れコッチからも來て吳れと云ふ話があつた、夫で香川縣からも來て吳れと云ふから道はドノ位あるかと聞いたら

八里ばかりあると云ふ、八里位なら宜しいから行かうと云つた所が若い先生達は八里行つて叩合つて翌日又八里歸へるのは苦しいから止めて呉れと云つた、ドウも斯う云ふ風ぢやから今の若い人には困るわいハ、、、、。

◎各地の劍客　夫は中々我々の若いときに廻つた時分から考へて見るとドコが擢んでると云ふことはないけれども先づ各縣到る所に五人より少なからず十二三人より多からずと云ふ所の立派な劍術遣と云ふて好いのが居る、夫は昔からの遣い手もあり又御維新後に爲つてから遣ふ人もあつて孰れも東京に押出せば警視廳で上等の組に這入れる者ぢやが、是はドウしてさう揃ふて居るかと云ふと是迄の各



藩々に分れて居つたやつを一縣に纒めたからである、技藝に遺傳のあると云ふことは可笑しい樣であるがドウも私はあるに相違ないと思ふ親が舊藩で師範役でも務めたものゝ子供は筋が好い、ドウも遺傳と云ふものはある樣に信ぜられる私は一度品川警察署で武術の大會のあつたとき呼ばれて行つたことがある、其時年の鹽梅では三十に足らぬ男がある、夫が劍術を遣ふのを見ると餘り錬磨したものではないが不思議に修業した人の遣ふ所を遣い居るぢやナ、ソコデ私は署長に問ふた、彼はドコの者で何と云ふ人かドッカの師範家の息子ぢやないか聞いて見ろと、所が聞かして見ると果して高知縣の人であつて師範家の川崎某の息子であると云ふことである、其歸途松

方に逢つて鳥渡其話をした、さうすると松方も『それは餘程思當ることがある、昔薩摩で名馬を拵へるには一代ではいけぬ前の親に極く日本流のハナカタを練込んで置いてサウして其子でなければ名駒は出來ぬと云つて居つた位のものぢや、夫故に劍術師範役の子に好い筋のあるは尤もぢや』と云ひ居つた、夫で今度備前の岡山より私の所に修業に來て居るものがある、是も師範役の子で今日、日々叩合ふて居る、其兄も嘗て私の所に來て修業したものであるが今度は其弟が付いて來た、矢張餘程筋が宜しい。

五人以上十人以下の有名の人との試合は面白く遣へるのぢや、其他は未だ生しいと云ふて宜しい飛拔けて夫なれば上手と云ふのも居ら



ぬ子、大抵こゝの警視廳に押出して上等の顔に這入れるものには出合つた、先づ中國の備前の奥村とか九州で芝井運八は有名の遣手であつたのです、芝井運八は六十六になりはせぬかと思ふ、私しに一か二つ上ぢやつたと思ふ、夫でもドウモならぬわい、可愛相に田舍に居ると年がいくわいネ、何しても都に居る樣に滋養物などを食することが少いからネ、是は年が老つて出來る仕事ではないからネ、奥村左近は五十代であらう、我々が大村で引立つて叩合ふたものと一所に叩合をしたと云ふから私よりは一段若手の部だ、未だ五十代ぢや、ソコデ頭數の總体に揃ふて居るのは筑後ぢやナ、是は先づ久留米では擢んでたものはないが腕前の優れて居るものが十四五人か

ら廿人位立派なやつが居つた、昔の稽古は朝九時から夜燈火を付けて九時頃迄遣つた、君達が聞いては可笑しい樣な話ぢや、能く續くものゝ樣だと今思ふと恐ろしい樣にあるが、寒中に一夜立切りと云ふてナ、其時分の六つ(今の五時)頃から朝の六つ迄(今の七時)面を被むり詰めで對手は何百人でも打込んで來るのを一人りで引受けて遣つたことがある、ドウモ今考へるとヒヤ〳〵する樣な話だ、私の所に備後の福山より來て居つた男があつて夫なぞはイツ迄遣られるか試めして見たいと云つて今の十時頃迄遣りよつた所が頭は腫れて仕舞ふ耳は聽えなくなつたから止めて仕舞つた、私は元來身体が強いと見えて夫を二度遣つた、併し酷いものぢや指の爪が拔け變つた



からナ、今度久留米邊では老人が出て來て『御前が四十年前コチラに來て叩合ふた所はアスコでござる』と云つて城内の跡計り存して居る所を指して云いよつた、今度は芝居小屋で遣つた、丁度今から四十二年前の話ぢやからナ、君達のまだ呼吸せぬ前のことだ。

◎昔と今の差　私の若い時代には劔を以て國家を維持するものと思つたものだネマア外國船などは眞二つに斬割ると云ふ勢で遣つて居つた、所が伊藤やら井上が歸つて來て所詮外國船は刀で斬れるものぢやないと云ふ話で始めて分つた樣なものサ、其頃は何しろ今の林友幸なども外國船は十里先に居るのに槍をしごいて行かうと云ふ時分だつたからネ、さう云ふ風で國家を維持するの武器で最も大きな

ものであつたから其遣り方も今の運動旁々に遣る精神ぢやなかつたから遣方が違ふ。

夫で私は今度マア重に中學とか師範學校とか云ふ所の者を集めて皆な叩合ふて見ましたが、是も一校の中に十人計りは遣へるものがある、元來中學校の生徒なんどは口の先で喋舌るときは豪傑らしく國家を荷へる樣なことを云ふが大間違で身躰が役に立たぬければ何の役にも立たぬ、又各學校を對觀して見ると大抵技藝が同じ位の度合のものぢやナ、夫から其私は是は一つ學校生徒の爲めに武德會を開いて見たなれば餘程面白ろからうと思ふのです、夫れで歸りましてから私は武德會で其論を起して見ましたが『至極宜しいから遣つ



て見やうぢやないか』と云ふので學校生徒の武德會を開いて見たのです、全体武德會は五月四日より開くが極りで是は桓武天皇が天下の武士を御集めになつた日であるから……所が其季節は學校は未だ修業中のとで來られぬから今度は暑い盛りが宜しいと云ふとに爲つた、夫で私はドコの學校に行つても有志者を集めて『團扇の風で寢て暮す樣な根性骨ではいかぬ是れから一旦事あるに於ては赤道直下にも驅込んで行かうと云ふ重荷を荷ふて居る貴公達は暑いから寢て居ると云ふ樣なことではいかぬ』と云つて暑い盛りに開かうと云ふ話をポツ〳〵仕出した、ソコデ今度開いて見ましたがマア人の百人も集るか知らぬと思ふて學校生徒の武德會を八月に開くと云ふことを

懸合ふて見た、所が意外にも人が集つて來て總体ぢや四百人餘り寄つて來ました、夫で合せて遣らせて見るとドコの學校でも皆な技倆が對だナ、然るに普通劍士の大會では誰と云ふ顔寄も出來るが學校の生徒だから薩張り誰は誰と組むと云ふことが別らぬと云ふから、『宜しいそんなら年齢で遣つて見ろ』と云ふので今度は盲目打に遣らした、所が大抵匹敵して居つた、實に其生徒等を集めて叩合をさせるのは面白いのです、其中には感心のやつがあつた、新潟から車馬の力を籍らず聲古道具を脊負て所謂昔の武者修業をして歩行るいて來たやつがある、夫から又三重縣の伊勢から三十里近い所を晝夜兼行して遣つて來て比叡山に登り夫から武德會に出て、スグ面小手を



付けて打合ふたやつもあつた夫はドウモ感心の話です、何でも其一行は四人で夜十二時頃に發程て握飯を持つてズット遣つて來たのだ、マア斯う云ふ風に日本人の氣象がならなければいかぬと思ふ。

劍道は將來とても進まにやならぬのです、扨て瓢簞の樣な顔をして吹けば飛ぶ樣な人間でば何事も出來るものではない、我々の育つ時分には懷中から書物でも出して讀むと文弱と云つて大變輕蔑したものぢや、今もさうだ文弱に流れるの弊は同じことで身體が鍛ふてなければ仕事は出來ぬ、身體の弱い奴輩が國家を荷ふと云ふことは夫は六づかしい。

籠手田安定、彼も劍道には熱心の男で二十歳前後から餘程叩合ふた

やつであるのです、けれども惜いことには仕官してから遣へなくなつた、其上酒ばかり飲んでな、人間も朝から酒を飲む樣に爲つてはいかぬ、林友幸は擊劍は遣らぬ槍一方だ、槍はマア林……夫から今の總理山縣……彼の槍は上手です、彼のは天禀の槍ぢやナ、杉、林なぞは餘程遣ふが山縣の槍は天禀の才があるナ、ドウも劍術者なぞと云ふ者は兎角酒を過ごしてならぬ、私なども若い時は晩酌に二升づゝ飲めよつたものだからネ、相撲取が飯を餘計喰ふ樣なものぢや、併し夫をイツ迄も過しては堪らぬ度合を取らぬければ、昔二升飲んだからと云つて今二升、飲んでは大變ぢや、此節でも懇親會などでは隨分飲みますけれども平素は戒めて居ります。



私は一体ドノ位いけたか昔廣澤(故參議)と私が餘り酒を澤山飲むちうて木戸が一日御馳走をすると云つて山口の湯田と云ふ所へ招きよつたから、私は行つて見ると、私と廣澤の二人りであつた、其時分は袴を着けた小僧が給仕に出る時分であつたサウすると未だ話が半ばに至らず酒も半ばにならぬ時に木戸が『モウ止さうぢやないか』と云ふはネ『モウ止さうと云つた所が人に酒を御馳走仕樣と云つて御主人から止さうと云ふはドウか』と云つたら『實は已も白狀するが餘り貴樣達が酒を飲みよると云ふことを聞いたから今日はドノ位飲むかと二升づゝチヤンと計つてさうして德利を混同せぬ樣に給仕に一本づゝ持たして酌をさせたが丁度モウ二升ぶゝがッつり遣つて仕

舞ふた』と云ふて又夫から遣りよつたが幾ら飲んだか分りはせぬ、所が近年になつて木村正幹に或る宴會で會ふたら、木村は其時勝手元で世話をして居つて非常に弱つたと云ふことだ、モウ上等の美い酒は盡きたので人を出して遽に山口を探させるやら大騒ぎを遣つたと云ふたが『ドノ位飲んだか』と聽いたら『三升や四升ではありませぬ』と云ふ話ぢや、若い時分にはそんな亂暴なことも出來るが今そんな事を遣らうものなら死んで仕舞ふハ、、、。

一体昇は何で劍術を遣ふかと云ふと晩酌を飲むのに酷い樂しみです、午後の四時頃から六時頃迄、遣ふてスグには行けませぬ水でも浴びて居るとスウッと耐らなく爲つて來るからネ、七時に丁度晩餐を喫べるが夫は美味いナ、併し醫者が云ふには『今、昔の樣に一夜立詰めなぞと云ふことは遣つてはいかぬ』と云ふから巡査を三四人相手にして叩合ふて居る、不思議に年を經つても呼吸はサウ變らないが、ドウしても悲しいことは身體が重くなるのだナ、人は呼吸が急しくなると云ふが私は呼吸は格別でない、又眼なぞは若い時より却つて能く利く、モウ此所と云ふことが見えたら此所は死んで行くか死なぬでも受ける所と云ふものはチヤンと見えるから、見えた時に同時に業が出て居らぬければいかぬ、業と眼と一所に往かなければならぬけれども今では年を經つて身體が重たいからさういかぬ。



## 書畫骨董

私の書畫骨董眼と云ふものはをうざつぱいの流儀で新古の差別なく流派なく唯私の意に適たものでさへあれば何でも宜い、例へ雪舟だ何だと云ふても意に適せぬやつは一向平氣だけれども老山とか何とかいふ位の畫でも意に適したものなら愛して耐ぬのぢや、私なぞは見るとの廣からぬのか知らぬが嘗て私は前職の時に新潟に行つた、其時篠崎(五郎)知事が何か御馳走しやうと云つたから私は『イヤ御馳走は好ましくない、此所には書畫を好む人があるさうだから夫を見せて貰つたら一番御馳走ぢや』と云つたら書記官が『ソンなら丁度宜しい、某が大阪から歸つて來て陳列して居るから』と云ふので行つて見たが一も意に滿つものはない、皆贋物であつた、マア良い



物は三府に幅湊して來る、稀には田舍にも良いのが出やうが俗に田舍廻りと云ふ位だからネ、私の朋友に森山(茂)と云ふものが居る、誠に古書畫には詳しいから私は素見に行くときには何時でも同人を誘うて行くさうすると森山の云ふには『貴樣には不思議のことがある、數百幅あるのを一遍見て廻つて夫から彼の幅と彼の幅とを持つて來いと云ふて其拔いたものを見ると皆な好い、アレは不思議だ』と云ふた、夫は私の嗜好の爲めであるか知らぬが、馬鹿のことを云ふ樣だが、良い物は鳥渡見ても精神が感應する、君達もさうだらう、人と對談して精神のない人ならば何を云ふのやら欠伸が出る樣になる、劍術を遣ふて面を被つてチツと睨み付けて見ると未だ手を下さ

ない内からコイツ遣つて居るなと云ふことが判る樣なもので古書畫を見るのも同じことだ、段々騙されて經驗が積むとメコが判る樣に爲る。

夫で昔木戸がさう云ひ居つたが私は名言と思ふ、一体私が劍術を遣ふのは木戸から勸められたので私は安井仲平に就て書物を讀まうと思ふて江戸に來てから木戸と頻りに懇意に爲つた所が木戸から『是非劍術を遣れ』と勸められた、其頃は木戸も黑船を斬ると云ふ考へのある時分だから『今書物を讀んで居つてはいかぬ、劍術遣になれ』と勸めたから私は『讀書の傍らに遣らう』と云ふと木戸は劍術遣に爲つて傍ら書を讀んではドウか』と云つた、さうすると私の藩の側用人をして居つたものがあつて是も勸めるので遂に劍術遣に爲つた、其時分木戸は二十歳前後であつたが『人は一藝に達すると其言ふことが誠に理につんで居る相撲取にしても未だ幕下迄はさうでもないが大關小結邊りに爲つたものと話をして見ると此奴は何事を話しても分るだらうと思はれる位である、一藝に通ずるものゝ談はコチラに通ずるものである』と云ふことを木戸が云ふた、夫はドウモそんなものであらう、向ふに業のあるものと話をして見ると面白いものである、書畫も此通りで良いものは直ぐと其精神が此方に感應して來るのぢや。

# 田中光顯子

## 芭蕉庵

彼の芭蕉庵は山縣侯が椿山莊を取入れるときに、今の陸軍中將の黒川通軌と云ふ人より、彼邊の方に行たら好い別莊地があるだらうと云ふ話が出た何でも是は十年戰爭後のことであつたと思ふ、或る日山縣と黒川と私と三人馬に乘つて轡を駢べ牛込から小石川邊をブラ〳〵遣つて行つて、最初黒川の視て置いたと云ふ土地を見た所が低い土地でドウも山縣の氣に入らぬ、それから又ソコを出て一の川に沿ふて山に上ると一つの門があつたので乘馬の儘門內に這入つて見



ると至極景色が面白い一歩一歩上に登つて行つて見た所が頗ぶる大きな松の樹があつて中々幽邃の地であつて小さな瀑布なぞも一つ二つあり、池もある、是が頗ぶる山縣の意に適つたので留守番に其持主を聽いて見た所が、岡本監輔といふ人が持つて居ると云ふことである、ソコで其人を段々聞合して見ると阿波の人で芳川（顯正）の朋友であると云ふことであるから芳川から岡本に照會して貰つて『山縣が別莊を欲がつて居るからドウゾ讓つて吳れまいか』と云つた所が、岡本は中々讓らなかつたが其後トウ〳〵讓ることに爲つた、それから話が後に戻るがマア最初三人で見に行つたときに、再び門を出ると其隣に芭蕉の住つた芭蕉庵と云ふものがあるソコに行

つて見た所が此所は誠に境域も小さいけれども眺望が開濶で至極古跡であつて面白い、私は至極面白い所だと思つて聽いて見た所が、此所は俳諧の宗匠が代々受繼いで來て居るから、發句の一つ位出來る者でなければ持つことは出來ないと云ふ話である、自分は發句も何も出來ないから是はトテも手に入らぬと思つて絶念して居つた、所がドウモ其景色が忘られぬ其頃自分は陸軍に居つたから快晴の時には馬に乘つて遊びに行つて前堤を乘廻し風光を愛して居つたがドウモ欲しいから其近邊の人に賴んで『若し讓る樣なことがあつたら一應話をして呉れ』と言つて置いたスルト明治十八年であつたか其頃の庵主は無事庵鶯笠俗名盧坪程三と云ふ人であつたが大阪に行くと



に爲つたので跡は誰でも宜からと云つて賣ることに爲つたそれで急に私が讓受けることに爲つた、其節庵主より『お讓りは申さうがドウかペンキ塗の家屋を建てることは御免蒙むりたい、それから芭蕉の祭はして呉れ』と云ふ約束で買受け、それから始終土曜日から日曜日に掛けてはソコで詩文會などを開いて保養して居つた、其後私は明治二十二年から警視總監に爲つて二十三年邊りは非常の繁忙であつて殆んど土曜日曜にもヨウ行かなんだ、それから明治廿四年の春、自分は警視總監を辭してから本邸は麹町にあるけれども芭蕉庵の方のみにかゞみ込で仕舞つたがソコにかゞみ込で仕舞つたその内に現職を拜命したので此官舍に移りました一体此芭蕉庵は江戸名所圖

繪にも出て居る龍隱庵と云ふのである、元は眞言宗の安樂寺と云ふ寺であつた、元祿十年何か故あつて黃蘗宗に改つた、サウして音羽八丁目の洞雲寺と云ふ寺の末寺に爲つて居つた、平石和尙と云ふ人が住持をして居つて其本尊は正觀世音で慈覺大師の刻んだものである、其後の住持が何か邪說を唱へて衆人を惑したと云ふことから、幕府の爲め沒收されて廢寺と爲つた、弘化嘉永の頃に幕府の旗下の士に志賀某と云つて、俳名を寒月菴如萍と云ふものが幕府の許可を得てソコに住して俳諧を樂んで居つたが、其隣に水神の祠がある其別當を兼て居つた、其座敷は風流韻士に貸して花月を賞する場所として居つた、それから維新の後ち其人が死んで仕舞つたので門人の



高橋秀行と云ふ人が其跡を襲ぎ、それから今の鹽坪程三と云ふ人に傳つたのである、それで芭蕉堂と云ふものがあつて芭蕉の木像が安置してある其脇に去來、丈艸、嵐雪等の塑像が置いてある、二間に九尺の茅葺である、元蕉門十哲の像を拵へる積であつた所が、仔細あつて出來ないので僅に三人の像が出來た由である、其下に大きな松がある、其松の根に芭蕉翁の墓がある、それで芭蕉は昔、安樂寺に寄留して居つたことがある、それは神田上水堀開の後、再び大修繕をすることが起つて其時幕府は藤堂に其工事を命じた、芭蕉は藤堂の家來であつて其堀割のことに從事して居る間ソコに來て居つた、所が其景色を愛して粟津の義仲寺に似て居ると云つて

五月雨にかくれぬものよ瀬田の橋

と云ふ短冊を書いて其處に殘して置いた、其後宗瑞ぢやの馬光ぢやのと云ふ俳人が芭蕉の寓居して居つた跡ぢやからと云つて短冊を集めてそれを五月雨塚と稱へ又其巨松を五月雨松と唱へて居る、其外は碑が一ッ二ッある、其一は直き門を這入つた所にある、それは夜寒の碑と云ふて

二夜なく一夜は寒しきり〴〵す

紀逸と云ふ人の發句が彫付けてある、外に漢文の銘がある、それに寶曆三年と云ふ年號が彫つてある、清水純淵と云ふ人の書いたものである、それから芭蕉の瀨田の橋云々の塚には寛元三年と云ふ年



號が彫つてある、モウ一ッの碑には

執着の心や裟婆に殘るらむ

吉野の櫻更科の月

と云ふ菅江の狂歌が彫つてある、其裏に寛政己未三月建と云ふことが書いてある、其直き東隣は山縣の椿山莊である、西隣には水神の祠がある、是は上水を拵へたとき祭つたものであると云ふことである、其向に川が流れて居る、是が神田上水で、それに橋が架つて居る、今駒塚橋と唱へて居る、昔は駒留橋と云ふて居つた、それは賴朝公が昔雪の朝、景色を眺めに來て其橋の上に駒を留めて見たと云ふ所から稱けたとも云ひ、又其川の少し上の所に太田道灌の山吹の

里と云ふものがある、其山吹の里から流れて來る水がある、茲に玉川上水も流れ込んで來る、古歌にも『駒留めて尙水かはむ』云々の歌があるそこで駒留橋とも云ふさうだが孰れが眞なるを知らず、向は一面の田園であつて、大隈伯の早稻田邸に對し其又向の高地は山である、雪の景色や又螢とか水雞などと云ふものは其處な邊の名所に爲つて居る、二十四年か二十五年の頃圖らず『龍隱庵再興の記』と云ふものが手に入つた、是は寺崎遜と云ふ人から貰つたのである、其人の父が俳諧が好きであつて之を持つて居つたと云ふことである、享和元年のものである、面白い記文であるから今度一日芭蕉庵で御覽に入れることにしやう、當時百部か二百部摺つて頒つたものであらうと思はれる、既に百年から前のものであるから今日では何處にもないものであるが幸に私の手に這入つた、それで私は何も出來ないが詩やら歌が好きであるので時々有名なる詩人歌讀などを呼んで詩歌を請ふたことがある、又嘗て山縣侯と椿山莊に於て八景を選まうと云つて段々詮議の上、既に七景まで出來て居つて芭蕉庵の夜雨と云ふのが其中の一つである、足下の社長の大岡さんが一日若い人を連れて來た、何と云ふ人かと聽いたら其人は博文館の大橋乙羽と云ふ人で寫眞を撮たり其記事を書かれて『太陽』に載つて居る、以上御話する通の次第であるから少し位手は入れましたが大抵は其儘存してあります。

# 郷純造君

## 印譜

私は二十八歳の頃長崎奉行牧志摩守に附いて長崎に在勤いたして居りまする間、二年計り小曾根乾堂に就いて篆刻を學びました、所がドウしても飛鴻堂の印譜位は置いて遣らぬければなりませぬがそれがないのですね、漸く詮索の中に或る人が持つて居ることを聞き出しましたから借受けまして寫しました、そんなことからして段々古印を集めることが好きに爲りました、その中に東京に歸へることに爲りまして牧志摩守の甥の堀織部正の用人に爲りまして勤務が中々



忙しう爲りましたからそんなことを遣つて居る暇がありませぬから擲てゝ置きましたが根が好でありますから平生心掛て居りまして偶には遣つて居りました、其後御維新になりましたのでそんなことに心を寄せて居る暇がありませぬからすつぱり止めて居りますと、圖らず町田久成上人の持つて居る印を二百顆ばかり買受けました、此町田の持つて居つた印には少し傳がありまする、それは汪梅庵と云ふ清人が道光の亂を避けて暫らく長崎に來て居りましたが此人が古印を澤山持て居りまして末路にはその印さへ賣らむければならぬことになりました、併し賣るにしてもバラに賣るのは嫌だ、ドウカ一に纏めて賣りたい、價は安くても宜いと云ふ話を大坪本左衛門と云ふ長崎

奉行の手下をして居つた人が聞き付けて『そんなら私が買う、決して是は散さぬから』と云つて買受けて印譜にしました、その後大坪は静岡に參りまして活版事業を始めましたところ失敗をしてその印を賣らなければならぬ樣になりまして『ドウか一手に纏める人に賣りたい』と云ッて中井敬所の所に頼みに參りました、そこで中井が二三の友人に談じて見ましたところ其頃町田久成氏が古印に凝つて居る時分でありまして、其話を聽くと其日にスグ買受けまして永い間愛して居りましたが町田もアー云ふ上人にでも爲る位の人ですからトウ〳〵それを賣ることになりまして私が讓受けることに爲りました、その印は是です、是を得ましたところが全体私は凝性ですか



ら此位ではいかぬ、ドウかモちつと欲しいと云ふので段々人のを讓つて貰ひましたけれども未だ滿足しませぬで長崎人で鐵翁の法嗣なる瑞嚴と云ふ人に年々千兩づゝ持たせて支那へ古印を購ひに遣りました其中に楊惺吾と云ふ金石家が秦漢六朝元明迄の銅印を澤山持つて來ました、そいつを私に見せたんですから堪らない『是非これは讓つて貰ひたい、皆んなでなくても宜しいから』と云つたが中々讓らない、その内楊惺吾と云ふ人も段々金の要ることが出來て、そいつを賣らなければならぬ樣に爲りました、トウ〳〵私が殘らず買受けましたが是は七八部は漢唐印で跡は元押と稱へますものですそれを得てから又段々集めまして今では二千顆計りありますので印譜を

拵へることに爲りました、即ち玉、晶、銅、石、牙、角、木竹、磁石等の印で松石山房印譜六卷、同續集八卷、隨意莊印賸四卷、法眼居印賞四卷を拵へました。

▲朱肉　此間或る人から肉と云ふものは何日の頃からあつたものだと云ふことを聞かれて鳥渡挨拶に困つたので今中井さんを呼んで其話を聽て居るところですが、昔は朱を膠か何んかを汁でこね廻して押したものではないかと思ひます其邊のことは能く分りませぬ、それで私は大藏省に居る時分に印刷局で朱肉を製造することに付て大層苦心をしたことがあります、當時私の論はべつたり押しても油が滲まない樣にと云つて餘り乾燥して肉が落ちる樣でもいかぬと云ふ



ので掛りのものも大變苦心しましたが、研究の上此印譜に押してある程のものが出來ました、是なれば明製のものとサウ違ひませぬ、押しても裏に滲む樣なことはない、清朝邊りの肉は紙の半面に捺す丈で兩面は捺ませぬ。

▲蘇子印略　是は印譜の中では著名のもので滅多にありませぬ、今近衛家に一つと岩崎家と伊勢の豪農乾某と云ふ人と私の所に一づゝあります、乾の所にあるのは河本本と申します、最も芙蓉の摸刻したものは幾らもあります。

▲鷄血石と田黃石　是は支那の昌化縣で出るもので有名な石であります、雞血と云ふのは色から稱けた名で全くは昌化石です、此位大

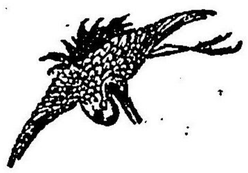
きいのは容易に得難いものでして雞血は印文には彫りませぬ、同じ雞血でも鐵針のあるのは澤山ありますが鐵身のないのは少くない、それから支那で貴とい石で殆んど玳瑁とまで價格を持つのは田黄石であります。

▲印語　印譜の文字は至極面白いもので飛鴻堂や學山堂の印譜には中々面白い印譜があります、殊に學山堂は當選に不滿があつて廬山の邊りに退隱して悶を遣る爲めに言ひたひことを印語に彫つたものですから中々時弊を痛罵した文字があります。

▲鑑識と證印　古印を澤山集めて研究すると古書畫の眞贋を鑑定する上にも非常な利益があります此十顆は私の尤も愛する逸品で何雪



漁文三橋丁敬身の彫つたもので支那でも今持つて居るものはない位です、併し印の樂みは銅印にあります古雅のものでげしてね。



# 板垣退助伯

## 相撲

一体私は武人出身の人間で誠に不風流のもので、七八歳の頃から相撲が好きであつた、土佐では九月十月に興行相撲がある、興行相撲と云つても土佐は一種の素人相撲で子供が寺小屋の退散から集つて相撲を取る、それで私の邸は廣いものであつたから土俵を築いて相撲を取らせた、寺小屋の師匠は小笠原淳助と云ふ人で家中の子弟は過半はそれに手習に行つたものである、其寺子が集つて相撲を取る、夫から私が十七八歳の頃には城下の鏡河原に二ケ所上の河原と下河



原に土俵があつた、所がソコには士族は行かれぬことに爲つて居つたが相撲好の侍は忍んで行く、そこに行けば些細の事があつても無禮咎めをしない、又平民もそこに來れば武士に對しても酷い用捨をするに及はないと云ふ一種の風習が其間に行はれて居つた、それで武士がそこに立混ることも殆んど公然の秘密と云つて宜い、武士は覆面で頬被をして相撲を取る、然れども其翌日になると云ふと出入の酒屋などが臺所に來てからに家人と話をして『夕べコッチの旦那を擲げて遣つた』と云ふから直き判つて仕舞ふ、所がドウモ酒屋に奉公して居るものとか米屋に奉公して居るものには大力が多くて動もすれば士族の方が敗を取ることがあつた、後藤伯なども餘程相

撲が好きであつた、私は後藤氏とは竹馬の朋友であつて若い時分は僅か一ッ年が違ふ計りであるから能く一緒に行つて相撲を取つた、町人の方から小さい相撲が出ると自分の樣な小さいものが出、大きな奴が出ると後藤の樣な大兵のものが相手となる、後藤は士族仲間では大關とはいかぬけれども確かに關脇位は取れたものであつたそれで御一新後後藤は東京に出て來たが其頃は三段目の頭や二段目の幇位に居る相撲には優に敗ない程取れた、又自分も非力ではあつたが相撲は上手であつた積りぢや、アハヽヽ、それから段々身を入れて見ると相撲は戰や武藝と同じ樣なもので殆んど變らない、孫子十三篇を解譯して相撲に嵌めても嵌らぬことはない位である、僅か土



俵の中を戰の全面に嵌めても嵌る位範圍の廣い虛實の變化があつて面白いものである、その中私は暫らく土佐に引つ込んで居つた間も彼の前に海山と云つて今友綱と云ふ年寄に爲つて居るものより一層相撲の取れた吾妻關と云ふ相撲取があつた、東京に一度は出たけれども、直に引込で仕舞たが是は非常に相撲が上手であつた、それに私は誓古塲を拵へて遣つて日々相撲を見に行つた所が段々眼が肥にて來て『貴樣は足が弱いとか、或は腰が弱い』とか云ふ樣なことを云つてドウ取れカウ取れと云ふ樣な事まで助言を云ふ樣になつた、それで彼の今の海山なども若い者の中から見立てゝさうして世話をして東京に寄した、又國見山が私の所に來たときは十八歳であつた

が段々世話をして遣つて今の様に取れる様に爲つた、一体相撲に一番必要のことは立合とそれから立合の上ズッ張りと云ふものが激しくあると敵が嫌がる。さうすると自分の儘に相撲が取れると云ふことが一番肝要のことである、それで私の贔負の相撲は皆な上ズッ張りをする、その上ズッ張りと云ふものはトント相撲が上に進んだのでは何ぼ敵へても出來ないものである、即ち三段目四段目位の時分に稽古せぬと上ズッ張りは出來ぬ、海山も國見山も立合に上ズッ張りが激しい、是は私が始終小言を云つて遣らせて居る、相撲は上に行く程贔負が薄くなつて來る、下の方から上の方に進んで行く間が面白いので、それは勝負事の常だ。



そこで本場所には缺さず見たいと思つて居るけれども兎角議會の開期中に政治社會が忙しいから見られぬ、それから夏場所は遊説に出掛くると云ふ樣な譯で久しくエー見に行かなかつた、併し政黨の方も後輩の人が段々遣りよるから此頃は政治の事より相撲の方が本色に爲つた。

◎常陸山　ドウモ常陸山の技倆は素人の私には分らないが、彼はちつくり敵の來るのを待受けて先きの力を自分に耐へたらそれから今度出て來る力と云ふものは非常なものである、トテモ當らぬさうである、彼の相撲はモウ一ッ立合に上ズッ張りで押し突飛して仕舞ふと云ふ手があつたならばトテモ對手者はあるまいと云ふ評判ぢや、

若し彼のぢつくり持ち耐へる力を支へる程の對手が出來ればそれとそ面白からうと云ふのは黒人の說である。

◎梅の谷　梅の谷は如何にも丈が足りないで常陸山に比べるとドウしてもそれ丈け劣る、何を云ふても彼の兩關は相撲社會の兩大關で未來の運命は未知數、未定數と云つて宜からう。

◎國見山　それから國見山に付ては斯う云ふ說がある、彼の身体はマダ中々太る、それ故、自分の力で自分の身体を支へることが出來ぬ樣になると弱くなる、それで稽古を確かりして身体が肥れば肥る丈け固めて眞の自分の力で自分がくるまる樣に取らぬといかぬと云ふ話ぢや。



◎海山逆鉾　海山はドウモ力の强いことは殆んど比類がない、がどうも自分の身体に重みがないから身体の重みの多い敵に向ふと其力が云ふことを聞かない、其上彼の男は力があるに任せて無理をして少つとも呼吸と云ふものがない、又逆鉾は力のない代りに呼吸ばかしで相撲を取つて行く、逆鉾の呼吸の半分海山に持たせると非常なものだがドウモ無理をしていかない手のない相撲なら仕方がないが海山は手は十分出るドウ云ふ手もするが呼吸なしに無理に遣るものであるから力を用ゐた程の功は少つともない。

◎本場所と花相撲　本場所と旅興行とは力の用ゐ方と云ふものは餘程違ふ、上手の相撲取になると田舍では自分の得意の手は見せない、

平常自分の得意手を見せて置くと敵手に氣取れて本場所の勝負に關係するからネ、であるから花相撲の勝敗を見て其全豹を窺ふとは出來るものではない、勝敗と云ふものは分厘の所で決するので勝ては大に力が數等優る樣に見えるけれども決して數等優るものぢやない、鳥渡虚に乘じて往けばズット行けるものだ、彼の立合の一つで一寸の力が少しも入らない所に立つたら『待つた』を入れる、力の入り切つた時にはいかぬ、力の入切らうとする少し前に待つたを云はずに立つ其分厘の爭ぢやから……夫から又相撲取に依ると緩みを取ると云ふ相撲がある、相手の得手に組ませて自分は得手に取つたから好いと思つて安心した其緩んだ所に乘じてコッチの妙手を現はす、そ



れから一ツ斯う立合に際して右得手のものが左を差すと是は實ぢやと思ふとさうでは右が實で左が虚になる、丁度桶峽間の戰に今川義元が鳴海七ケ所の砦を陷れて得意に爲て居る虚を突いて信長が桶峽間の本陣を突く樣なもので其虚實の變化と云ふものは餘程面白いものであらうと思ふ、私は嘗て山地に『御前少つと相撲を見に行つて軍の誓古をしたらドウカ』と云つたことがある、相撲取に限らず何でも武藝は腰が悪るければ駄目ぢやテ、アハ……今日は不意打を喰つて話をしたから前後した所は能く賴む。

# 伊藤雋吉男

## 茶

私は成る丈け物好にならぬ樣誡めて居りましたけれども茶は近來好きになつた譯ではなく、私の亡父も叔父も二人とも俳諧や茶事が好きでありましたので幼少の時からそれに親炙して知らず識らずそんな事を覺える樣に爲りました、所が御一新後殆んど茶事などは無用の長物として度外に措かれる樣に爲りましたから全く回顧りもしませぬでした、併し妙なものです明治十四年ごろでございましたらう、又思出して家を持つて見ると茶席の一つ位拵へて見たい心持に爲つて



て素人考へで茶席を拵へました、それから後と云ふものは忙がしいものでございますから茶席が只の酒飲場所と爲つた位です、サテ年を取るに從つて妙なもので昔覺えたことが何等かの因緣と爲つて近所の師匠に就き一二、聞いたり、それから追々茶友も出來たり京都の千家の宗匠が東京に參つたので本當の事も聞ける樣に爲つた、此節では暇があれば客を招ぐのを何より樂みにして居ります、一体昔時武家に於て茶の流行いたしましたに就ては種々の説もありますので、是が斯うと云ふ取留めた説もありませんが、私のマア此は臆説に過ぎんことでありますが私の考へでは珠光紹鷗といふものは全くの茶人であつたと思ふ、此は其時分の茶といふものは御存知の通り

書院の茶で一の禮式であつた、足利義政公あたりの茶といふものは所謂茶が一の禮式になつて居つた所からして、諸侯方が大に茶を學んだものであらうと考へます、而して茶の禮式になつて居るに就いては素人では出來んものであります、ですから珠光紹鷗抔が其禮式を擔當して居つたものであらうと思ふ、併し乍ら此利休になつてからですネ、茶の禮式は其儘存して居つたのでございますけれども此茶道といふものを詫茶といふものにしたのは利休であらうと思ふ、其詫茶といふものにしたことは太閤の命に依つて利休がしたといふ說もある、詰り東山時代公方の位地に居りましたなれば、ドレ程の驕奢を盡した所が知たものでありますけれども餘り驕奢に長じて無暗に得



難き物を取集めたり何かして爲めに、流石の公方と雖も遂に勝手許が不如意になつたに相違なからうと思ふ、それから其驕奢の風を後世に傳へては宜しくないといふので利休が詫茶といふものにしたことであらうと思ふ、乃ち草庵を結んで禪家の方丈に形どり僅に膝を容るゝに足るものを作つて、其中で所謂古い釜で古い茶碗で搆はんといふ樣なものにしたのは全く是は利休が時弊を矯める爲にしたのではなからうかと思ふ、此は利休が云ふた言葉に其意味が見にて居る、それで私の臆斷では東山以來驕奢に陷つた茶の弊を一洗して主として驕奢を戒めると云ふ風にしたのは先づ利休を善く見た側から出た說でございます。

又一方に於ては太閤の時代に重に茶の流行したといふものは御存知の如く千戈正さに治まつて人心が安逸を好む樣になつたので自然人心が風雅のことに歸向する樣になつた、故に當時太閤の奥向に茶が盛んになつたので諸侯方も一時に茶に傾いたといふのは如何云ふものであるかと云ふと其諸侯方に於ても攻城野戰の鎗先の功名ばかりではいかん即ち内謁の力、女謁の力を藉りて宜しく時世を旨く遣つて拔けなければならんと云ふ所から諸侯方も此の女謁を得る一の機關として茶を勵んだものだらうと考へる、彼の所謂禪味から茶に入るとか高尚の心から茶を嗜むといふ譯でなくて利益の方から出たものであらうと思ふ、此は茶を惡るく見た側から擧げる所の臆測であります。



偖利休は折角左樣云ふ考へを以て重に驕奢を戒めるといふ意味で遣つたが、其弊といふものは利休以來今日迄脫せず茶と謂へば人毎に驕奢の重なるものと思つて居る、隨分茶を嗜む爲に分不相應な古物を買入れたりなどして家產を倒したものなどもある位である、素より此茶を遣るものも茶の意味の極簡單のものであるといふことを知らぬのではないが兎角道具を好んだり華美を好んだり器物裝飾等、分相應なら宜しいが分外のことを遣る樣な傾きが段々增長して來た樣である、併し全く茶の眞味といふものを翫味して見ると、サッ道具に凝たり珍らしい物を集めたりするといふことは、宜しくないの

であります、けれども兎角鳥渡一ッ珍らしい物を見れば朋友が互に競つて之を買取らふといふ樣な風が未だに存して居る、故に動もすれば茶人は茶味禪味とか何とか言ますけれども此はナカ〳〵六ッかしいものであります、昔は隨分茶道に高名の人がありまして彼の利休の時代に一貫といふ隱遁者がありました、是は江州邊に居つた人だと思ひますが極の詫茶で利休も其人と懇意であつたさうでございます、或る時利休が其人に招かれて往つたが流石の利休も此一貫といふ人には一本遣られたことかあつたさうでございます、マア私から判斷を下させると所謂茶の眞味を知つたものは利休よりは寧ろ一貫ぢやないかと思ふのですドウも此人の出生は能く分りません、全く隱遁



者で一ッの釜と一ッの茶腕だけで遣つたのです。

マア此茶事が世道人心に益になるかならんかと云ふとは是は論ずる迄もなく世教以外のことであらうと思ひます、併しながら人には自から一の嗜好は免れんものでムますが其嗜好の中にも高尚のものもあれば野鄙のものもございまするが茶は昔時諸侯方に於ては遣らなくてはならんといふ位で一の禮式の中にあつたものでムますから高尚のものには相違ない夫から又此女子の教育の中に茶は一のサイエンスに置かれて居るのはツマリ此は茶味を味ふといふ程までいはないが茶を遣ると、舉動振舞から總ての器物の取扱のことから又座敷の物品を飾付くることなど其家を飾つて往く事に於ては茶を心得て

置かんと自然不間のことを遣りますから其爲に女子に茶事を遣らせることは至極宜しからうと思ふ、茶に通じて居りますと料理向なども無用のことを省いて味ひなども大に心を用ひまして一方から云へば高尚にもある又一方から謂へば經濟上の助けにもなるだらうと考へます、それで能く此茶の眞味を悟つたといふ人もありますけれども其悟りを其儘事實に行つた人はあるまいと思ふのです、隨分口では旨いことを云つて居りますが、偖て其事を實地に現はすことは出來ぬものであります、此間も戯談ではありましたけれども或る朋友に話しをしたことがある『お互に茶味だとか禪味だとか口には高尚の話はして居るけれど全く此禪味を悟つたと云ふならば其證據を擧



なければならん否らざれば茶事に悟道した人とは云はれない、唯だ腹の中で悟つたのでは何にもならない、事業の上に夫が顯はれぬければいかぬ、即ち古人も云ふた如く釜一つに茶碗一つで其他は氣に入たる二ッ三ッの物丈けにして他の所有品は殘らず賣却するか或は呉て遣ると云ふ程の勇氣のある人でなければ本當に悟た人とはいはれないぢやないか』と云ふたことがある、兎も角珍らしい物を見ますると欲がつたりするのは一般の人情ですが夫を斷乎として打破つて自分の所有品と雖も適宜のものだけ殘して跡は殘らず賣るか呉れるかソコまでの勇氣がなければ本當の茶道に悟入した人とは云ふことは出來ない。

茶に用ゆる花は挿花とは大變趣意が違つて居ります、所が挿花の遠州流であるとか千家の古流であるとかいふことがありますが果して夫が小堀遠州の考へから出たものかどうかソンなことは能く知れませんが、併し此遠州流とか何とかいふ花を見ますると決して茶には用られぬのでして、茶の花といふものはアレ程八かましいものではない、小供などが無我無心に挿したものが大變面白いものがあります、何れマア此花の性質は氣候にも依りますし、其他花瓶、軸物にも依ります、第一に此茶席では軸物といふものが一番の眞になつて居ります、軸物から凡ての物が割出されて來るのであります、茶席には畫は餘り掛けません、最も畫讃のあるものなら宜しいが畫ばかりのものは餘り用ゐません、茶席へ掛けるのは重に古墨蹟であります、夫で茶道で珍重致しますものは、宋元あたりの禪師の書いたものです北條の末代に亂を避けて來朝した歸化僧などが澤山持つて來たものがあります、其有名な禪師たちの書いたものを見ると誠に面白いものがありますが、好いものは誠に少うございます、私共も偶には拜見したことがありますが、如何にも面白いものがあります、夫から下つては大德寺ものです、是は三千家が重に主張したもので千家では大德寺ものでなければ掛けぬといふた位である、併しそれは甚だ窮屈な話でありまして必ずしも大德寺ものには限りませぬ、名僧智識の書いたものならばドノ宗旨でも宜いのでございます、そ

れから又此大德寺の中でも開山の大燈國師に續いて一休和尚迄を最も尊み、其次は澤庵和尚であります。

それで此茶の流派も澤山ありまして其遣り方も中々多い、生涯遣つても迚も覺へきれぬ程あります併し最初は極く優さしく、習い好い樣に順序がたつて居ります、流石三百年以來段々研究に研究をして拵へたものですから能く整つて居ります、併しそれは全く遣り方のみで技藝に屬する方で茶味の精神には屬せぬ方ですが動もすれば其精神さへ取れば良いと云ふ人があります、チヨイと聞くと如何にも高尚の樣に聞こへますが其精神といふても中々無形物ですからして矢張技藝から這入らなければ精神の精神たる所は到底分らぬのであります一足飛びに精神といつてお經一卷も讀了らぬで此で悟道したと云ふと同じ樣なものでドウもさう思ふ樣にはゆかん樣です、それで只今では松浦伯爵是は御家柄でもありまするし中々茶事に掛けては大家で御傳來の名器も澤山ありまして能くお客をなされまして私などもお招を受けて參りますがナカ〳〵其お席は御質素でありまして御料理向なども『今日の茶は無闇に御馳走が多くて不可ぬ成丈品よく質素のとにして誰でも樂しむ樣にせぬければ不可ぬ』といふ事を御話なされますが私共が左樣の事をいへば『出來ないから痞我慢にアンなことをいふ』と人に聽かれますけれども松浦伯の口からサウいふ風に茶の時弊を矯めて眞の精神のある所は改良して往くと

謂ふ樣なお考への出るのは結構のことでありまして私共は大いに敬服いたして居ります、それで此茶のことに就いて古人の滑稽談とか失策話とかいふ樣な逸話は備前岡山の人で只今入谷に居らるゝ岡崎惟素と謂ふお方が居ります、此人が唯今茶道に關する大部の著述に着手して居りますから面白いことも澤山ございませう、マア此私のお話はお書になつては誠に迷惑いたしますから成るべくは御免を蒙りたいものでございます、此間鳥渡聽きましたが益田克德さんのお話が大層面白いといふことでありますが未だ拜見いたしませんがアの人はナカ〳〵事業に忙しいにも係はらず茶には餘程の心得がありまして感心の人であります、兄さんの孝さんもお遣りになつて、此



間遇いました所が『ヤ私も今迄種々のことを遣つて視たが能く味つて見ても茶道程面白いものはない』と謂はれました『夫はマア宜い其位分つて來れば結構だ』といふて時々お招ぎ申しましたがアノ人も忙がしい人ですからツイ見へられませぬ。

# 伊藤勇吉君

## 盆栽

私が盆栽を愛する樣になつたのは歐羅巴に往つて居る間、歐羅巴風の庭を見て此所に日本の楓だの松だのを植にたら面白からうと思つたのが初りでそれから歸朝して病氣に罹り神戸に滯在して療養して居るとき日々植木屋を素見しましたところ天然の風致の好い所ですから從つて樹容の面白いものがありました、補公神社の緣日なども東京の緣日と違つて趣の變つた面白いものがあつた、併し其頃は未だ盆栽と云ふものゝ頭はなかつた、唯植木をいぢくる丈でありました



たが東京に住む樣に爲りましてから段々好きに爲つて芝公園の苔香園などに參りまして種々のものを見ました、先づ現今では苔香園の老爺が一番盆栽の學問には長けて居りまして器用で種々のことを調べて居ります、盆栽と云ふものは極つた季節に植にて極つた季節に植換へて春秋に肥料を遣り毎日數回水を掛けて遣る中々世話のものです、一体盆栽と云ふものには少さくして大木に見にるものと品柄の珍らしいものと大きくても樹容の面白いものとの三種があります、是なぞは模です小さくして大木に見にるものです、（圖は略す）夫から私はタツタ一本實生の柿を持つて居りましたが伊東己代治が來て見て『是非慾しい何かと換へて呉れ』と云ひますからこの松と換へ

て遣りました一体私は松は嫌ですが此松は御覽なさい、コンナ小さい物でも松茸が出て居ます、夫から是は索江藤と云て近頃臺灣から來たものであります、私は一ッ植木屋を驚かして遣らうと思つて其根を割て幾つも移植しましたが根が出るか出ぬか知れませぬ西洋人は大變花物を賞美しますがヒネくつて居る苗木の松などは土臺頭に盆栽觀がないから分りませぬが此間私の所に墺太利の代理公使が遣つて來まして色々話をして盆栽を見せましたが如何にも面白いものであると申しました、固より外國人には盆栽の頭はありませぬから唯小さい木で古いところを面白く見たものと思ひます、マア段々御覽に入れますが是は銀盃花と云ふものでありまして其花は梅と少



しも違はない、又その葉を揉んで見ますと非常に好い香のするものであります、初めは何と云ふものだか分りませぬでしたが植物御苑で調べて貰つて銀盃花と云ふことが分りました、アスコの山の半腹に植木室を拵へる積りで今普請中です、ドウモ好い物が來ると惡いものは端から片付けて居りますがそれでも溜つて困りますからね、それから是は春黄梅と云ふものであります、もと日光の脇の方に鹿沼と云ふ所がありますが、そこの舊家で薪炭屋をして居る老爺で七十歳位になる人がある、此人が子供のとき山に草取に行つて大きな木の根子を見付けてそれを取ッて休んで居ると向ふから一人の樵夫が奇麗な花を持つて來るのに逢つた、ソコで其根子と花と交換

して呉れないかと云ふ話をして相談が出來て取り換へこをして持つて歸つた、それから七十何年の間毎日手をかけて少しづゝ根上りをしてトウ〳〵人工で斯う云ふ面白いものにしました、私はチラリと其話を聞いて慾しくなりまして態々旅費を遣つて人を出して買ひにやりましたところ『そんなに御好きなら献上ませう代には及ばぬ』と云つたのを無理に五圓ばかりの金を置いて讓受けて來たものであります、それから是は櫻桃です、征清軍の時の分捕品中にあつたものですが、新宿の植物御苑の福羽技師から貰た物であり升、唯今モ一ッは宮中の振天府の横にあります、花は詰らない梅見た樣なものですが餘程花は早く咲きます、櫻實は少さい林檎見た樣なもので極



く味の好いものです、植木鉢も種々ありますが竹などは根生の力の強いものでありますから小さい惡るい鉢は直き破れて仕舞ます、先づ支那燒で西貢邊りから來るものは中々宜しいが高價のものです、コンナ粗末らしい鉢でも五圓位します、好い鉢は箱に入れて置かぬと冬になつてから氷つたり又直きに破れますから箱に入れて保護して遣らねければなりませぬ、それで私は一体ヂッとして居ることが嫌ですから飛廻つて居つたが盆栽を味ふ樣に爲つてからは朝も早く起きて水を遣るとか庭を散歩するので大變身体が健康に爲りました、併し中々金の費る贅澤の道樂で藝者買なゞの方が餘程金が要りませぬ、世間の普通の盆栽家は大体日覆をしますが、もと〳〵外に出て

居る性質のものでありますから、内に置くのは變則である、私の處では日覆を掛けぬで夏でも外に曝らして置く、其變り水は日に四五度も遣ります、斯ういふことはどうしてゝ自分で手を下して遣らなければ面白味はありませぬ、チット位肥料の臭い匂ひなども意とせぬで培養して見ると中々趣味のある面白いものであります。

# 土方久元伯

## 旅行

伊藤さんの北游は、今度は越山能州と云ふ位の所に行かれるのだから侯にも嘸詩嚢を肥さるゝことであらう、どうも詩は出歩るかぬと出て來ない、私は沼津の東宮殿下よりの御召で是から伺候するところである、此汽車は國府津で乘換になるが、アスコからは上等室がないさうだ、併し此間の風水害で馬車や船の厄介になることを思へば何ともない、一体私は旅行が好きで未見の地を見ることを何よりの樂みにして居る、本年は高野山から粉河寺と云ふ西國何番かの札

所に參詣し、それより紀州の和歌の浦から大阪に出で暫らく滯留し其間に姫路にも烏渡行つて見た、戻り掛に彦根の樂々園に行つた、豫て彦根の樂々園の名は聽いて居つたが、何の田舍のことぢやからと思つて侮つて居つたところが行つて見ると中々流石に大藩の力で拵へたものだから立派なものである今は彦根の市有に爲つて居るが湖上の風景を双眸に收め又園内に近江八景を摸擬して出來て居る、詰り此處では八景の全面を見る譯に行かぬから別に八景園と云ふものを拵へたものと見へる、兎に角好い景色ぢや。

## 邸宅

一体私の頭は極く疎の方で細かいことは誠に嫌でありまして今居る



邸は小石川の植物園の隣りで元大名の邸三つと旗本の邸と四つ併して拵へたのです、私の人に誇るのは庭に大木が多い、杉や松が澤山ありますが一番大きなやつは丁度日光山中にある樣なものがあります、二十六年に　陛下の行幸あらせられ翌日は　皇太皇后　皇后陛下の行啓あらせられました、それから私は大きな碑を建てました、其碑文は川田剛が書いて呉れましたが其文中に私の極く得意のことがある、其文意はどうかと云ふと

昔より此大臣の邸に行幸のあつたことは中々例が多い、後龜山天皇は足利義滿の北山邸に行幸あらせられ、後陽成天皇は秀吉の聚樂の第に行幸あらせられ、後水尾天皇は德川家光上洛の節二條城

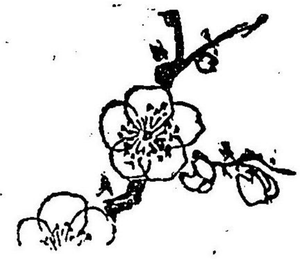
に行幸あらせられ金銀珠玉を鏤め供奉の多き食物の美なる鳳凰の燒物龍の膾を竝べ其餘献上物夥多あり、稱して古今の盛典とす、併し其時分は政權武臣に歸し居りしを以て、萬乘の尊を以てするも實に惴々爲として臨御あらせられし譯である、然るに今日大臣の邸に行幸あそばさるゝは大に其趣を殊にす、大臣は終始勤王の志を懷き維新後鼎位に登られたるものなるを以て君臣の關係、水魚の交篤きを知る、今此邸を見れば西洋の建築法を酌酌して堅牢に出來て居る、又庭を見れば古木多く畑あり、敢て珍禽奇獸の蓄なく奇石もなし其質素なる志、子孫に到る迄失はない樣にしなくてはいけない



斯う云ふことを書いて呉れた、それから私は庭石などは取除けて仕舞ひ、以前植木屋などを入れて松の樹の枝を下ろしたり何かしたのを止めて仕舞ひ、天然の景色に任かせ蒼然古色を帶びるのを樂しみにして居る。

それで今度茅ヶ崎の海に面する山の樹間に別莊を立てました、この十月中には落成を告げます、重に冬向の建築です、どうも人の性質に依ると少さく建築して玄關より隅から隅迄奇麗にして樂しむ人が多い、私の流儀はさうでない、客間や應接の間の如き、奇麗にして置くべき所は奇麗にして置くが外の間に行くとさう構はぬ流儀です、是は私の頭腦の組立が悪るく疎放の方で細かいことに注意したり何

かすることは不得手の方です。





# 曾禰荒助君

## 菊

菊の培養といふものは餘程興味のあるもので、私は先年から秋香會といふ會を設けて、數年來種々奬勵を遣つて居るが、此節は會員も餘程殖へて三百人許になつて來た、何でも來年花を見やうといふには今年から心懸けて置かんければならん、ソコで今日は六つかしい話は此次の事として、極素人の……誰にでも出來る一と通の御話をしませう。

### 土の拵へ方

先づ菊を作らうといふには、一年まへから土地を拵へて置かなければならん、其土は赤土と黒土と少し砂の雜つた土と此三種の土を混合して遣る、黒土は畑の芋を一年作つた跡の土が良い、之を遣れば虫の發生を避けることが出來るので、此三種の土を取寄せて、篩に掛けて能く配合して雨露の當らぬ所へ置く、夫から大寒になつてから三遍ばかりチト強過ると思ふ位の下肥を遣つて、能く干揚て俵に入れて積んで置く、是も雨露のかゝらぬ所でなくては不可ぬ、モー少し能く遣らうといふには糖と油糟とを等分に混合して一斗の土へ一升位入れる、即ち十分の一位だ、サウして俵へ入れて堆積して置くと、土が眞白になつて灰の様な工合になつて居る、是が極簡單な土



の拵へやうだ。

## 菊の作り方

花の咲初は十一月三日頃に咲く菊もあるが、あれは早過るので何でも月半から廿日頃咲のが宜い、其頃咲た花は十二月十五日あたりまでは、極く清潔で奇麗に咲いて居る、段々花も見苦しく成つて來るから花壇の覆を取つて霜に打せて仕舞ふ、葉は凋れる幹も曲つて來るからソコで根本から切拂て仕舞ふと、其根の所へ丁度筍の様に白く小く芽が出て來る、其芽を見分て餘り勢の能いのは不可から中位のものを取つて他の所へ植へる、其跡の古株を掘採て燒て仕舞はぬと、來年になつて菊へ虫が湧く、是が緊要な所で古株から悪い虫が傳播

するのぢやから、忘らぬ樣燒捨て仕舞ふ、是は冬至あたりが宜いのです、夫から植た方は覆をして雨雪に逢さん樣に寒氣に侵されん樣にする、デ餘り乾き過ぎると思へば、極能い天氣を撰んで、午前の十時から十一時位の頃少々水を遣る、午後になつて遣ると凍るといふ恐があるから成丈暖い日の午前に遣る、三月頃迄は夫で宜しい、三月に這入てからモー寒さも薄らんだと思ふ頃、暖い晩を見ては覆を取り、菊が霜を凌げるといふ程度を見計つて、徐々に覆を取つて、三月の月末か四月の始めあたりに植換る、此時にはモー二寸位にはなる、其苗をコー先の方を持て曲げて折れる所から摘で取る、デ一月ばかり置くと、モーヅン〳〵成長して來る、爰で四月の末か五月



の始め頃に……尤も其年々の氣候にも依るが、其時分に本植をする、此時に昨年から拵へて堆積して有る土を取出して見ると丁度灰の樣になつて居る、先づ此所へ植やうとする所へ穴を掘て直徑一尺二寸深さも一尺二寸にして、下の方へ二寸ばかり砂を入れる、其上へ五寸ばかり例の肥土を遣つて、其上は屋敷回りの土を施つて其上へ、先づ菊にも依るけれども三本か四本づゝ、頭を摘だ苗を植る。本植をして二週間も經つと、非常に能く成長して來るが、其中には力のたりない勢の少ないのが出來るから、其へは少しづゝ肥土をグルリから施ると、ズーッと勢が着いて成長して來る、爰で其菊の中心へ大丈夫の竹を立てゝ徐々垣を作る、此竹が脆弱だと後に困難が

出來ますから、成たけ確にして其側へも夫々竹を立てゝ垣を作り、菊の幹の伸びるに從つて、上を二寸位殘しゝ、琉球で括つて遣る、何でも一週間に一遍ぐらいは括らなければ可かぬ、餘り柔い所を括ると折れて仕舞から上から二寸下つた所から三寸迄位の所を括る、コウして八月の末頃迄置く、が其中に酷く乾き過たと思へば水を遣る、此水は清水はよくない、流し元の水も悪るい、水瓶か何かの子々の湧いて居る樣な水が宜ろしい、流し元の水をかけると油虫が湧いて困まるから、水溜の水へ少しづゝ小便を混て十日に一度か、二十日に一度位施れば至極宜い、夫からモー夏も過ぎ八月の末頃になると始めて御見舞をやる、其肥料は油糟を一週間も水に入れて置いて、



其水を遣る、其割合は五十分の一位、油糟一升へ水五斗位で宜しい、夫で成長を見て九月の始になつてモー一遍肥料を遣る、是は前に遣つた肥料へ、小便を少し入れる、是は油水二十分一へ小便一分位でよい、メコでモー十五六日になると蕾が見へて來る、又爰で花肥料といふのを一度遣る是は前の肥料で宜しい、彌々莟が揃つて來ると其見立をしなければならん、是が六つかしい、何でも眞中へ出て來るのは柳葉に成つたりしてドウも味く花が咲かんものですから、其眞中の莟を取つて仕舞ふ、サウすると二三日經つて覗ると又眞中に成つて居るのがある、ドウも夫もいかん、ソコで始め眞中へ立たなかつたので、極くヤンまるい莟を置く是が上等の花を持つので、此

撰り方は餘程念を入れて遣らなければなりません。

總て施肥には天氣の三日位續いた時でなければ、幾許施ても其効はない、土地が幾分か乾いて吸收力を持て來てから遣るが宜いので、彌々花が開き始める是を咲下しといふが、其時には手を附けては不可ん、花が殘らず開いてから花壇へ移すなり鉢植にするなりする、菊の幹といふものは、皮さいあれば中心は折れても構はん、夫だから種々曲たりして細工も出來るのです。

## 花の種類

菊の花といふものはドンな菊でも菊は菊に相違ないが、菊作りの方でいふと、平瓣、管瓣、匙瓣とコウ三つ備つて居ないと本當の菊と



いはないお化といひ變り物といふ、平瓣といふは普通平たくなつたので、丸くなつて居るのは管瓣の方で是は嵯峨菊に多い、匙瓣といふは瓣が本は丸くつて先が少し開いて匙の樣になつて居るからです、此三瓣揃つた菊でなければ、菊とはいはなかつた、尤も菊は其花と花と番はせて、種々の變つた花を持せることも出來る、是は曾て津田の著した交合論にも見へますが、毛のある菊と毛のない菊と番はせて、種を取つて實生にして一種の面白き花を咲かせる事も出來ます、又其種類は二千だか三千だか殆んど無量でありませうが、一度命けた名は他人が其名を外の菊へ命ける事は出來ない、若し之を命ると盗人といつて是は八ケましい是は昔のことだが、何故此三瓣を尊

くいふたものかといへば、菊が段々狂つて來ると、平瓣はコウくるまつて來る之を抱へるといひますが、匙瓣は其抱へる瓣を持上げて居る、其中から管瓣簪の樣に突立て居る是が三瓣の所作でありますが、今日では此三瓣を一瓣で働いて居るものがある、三人の御役人である所を一人で遣つて居るといふ働物がある、是は本年になつて私共の會で評決の上資格のあるものとして採用することにしたけれど、ドウも矢張面白味が少ないものです、種類も年毎に變化して行きますで大昔からの菊は極少なくなりましたが、大御所樣時代からのは、鹿の子菊といふタツタ一種位のものです。

夫から實生といふのは、種を取つて夫を丁度茄子を蒔く時分、春の



彼岸時分に蒔いて置く、始めはチョイと席でもかけて、雨のたゝけを防ぐ樣にする、夫から三分位に伸た所をピンセットで引拔て植換る、是が隨分面倒のもので、始めはドンな花を見ることか分らない、何れも實生にすると多少の變化があつて面白いものです。

近年大分菊作りが熱心になつたが、大隈伯も菊の上手な男を置いて、能く方々から種類の異なつたのを取寄て作つて居るが、府下にも本當の菊作りは少ない、廣尾の笑花園がなか〳〵熱心に遣つて中々能い菊が出來る、其他團子坂に二軒ある、彼の鍬蕎麥の所に一軒、又田村といふものゝ所と、此位のものだ、ドウも菊作りは場所と土地とが廣く要るから困る、何でも五六千坪の屋敷でも、忽ち其土に窮

する、二年目の土を用ゆることが出來ないのは閉口サ。

## 外國に於ける菊の流行

外國で菊の培養の進んで居るには實に驚くの外はない、昔しは何所から往つたものか極ツマラない佛菊といふて、墓場にあつた位のものであつたが日本から往つたのは十年以來のことでせうけれども、中々熱心に遣るので殆んど全歐洲といふても能い位い菊の培養をして居る、私が葡萄牙へ條約改正で往つた所が、黄菊の立派なものがある、夫が私の日本で作つて置いた菊に能く似て居るから『此菊は何所から求めたといふたら』是は此所で出來たものだ』と云つたが、私は深く疑つて自分の丹精した菊ぢやと思ふたほど恥かしくない菊



でした、歐羅巴では多く中菊を作りますが、先づ大抵三尺五六寸位、一メートル位の菊が多い、日本の大菊の樣に六尺も九尺も丈が伸るといふ樣な大菊はない、花もまた狂いといふこと迄を賞する程には往かんけれども、兎も角中菊は力が強くつて能いといふ樣になつて來て殘らず實生で研究するのですから迂ッかりすると本家が負る樣になる、外國の共進會は中々盛んなもので私は申悪いけれども、御所の菊でも共進會の菊と比較したならばドウか知らんと怪ぶむ位です、是迄日本では菊を作るのは仙人か、御隱居のする仕事だと思ふて居たのですから、發達の鈍ろいも無理はない、私も秋香會を拵へて十年も經ちます其奬勵も種々にして、年々七八百圓の金をかけて、

或は會費或は賞與といふ樣にして栽培者の發達を促して居るが只今では會員も三百人ばかりになつて、漸々事業も其緒に就ました、此間農商務省へジョンスといふ人が來て『貴君は大層園藝に御熱心じやさうナ私も隨分遣りますから、一つ競爭をしませう』といつて笑つたことがあります、兎も角我邦の人には歐洲に敗を取らん樣に勉强して貰らいたいものです、お前は菊を遣るから盆栽が出來るだらうといふ人が多いけれど、私は盆栽は一寸とも不可ん能く伊東己代治さんや伊藤勇吉さんが盆栽家で度々勸められるけれども、種々の鉢を並べて置くと何だかコウ植木屋の樣な工合で、ドウも氣が乘らんのぢや。



## 菊と薏の別

菊と薏とは同じ形でも決して混同してはならん、菊といふものは、其花を食られる位のものだから虫も好いて食ふ、薏は大層苦いものだから虫も好かない、夫で薏は黃色に多いので紫とか赤とかいふと薏は少ない、菊には胴虫髓虫といふて其幹の中へ虫が出來ますが、薏には決して胴虫髓虫はない、夫故に薏は作り易く菊は作り難い、此胴虫を取には細き銅線を以て幹の虫糞の出て居る穴から入れて其銅線へかけて引出す、ドウいふ譯ですか此胴虫は新月から滿月までは穴の上の方を喰ふて居るが滿月以後には穴より下の方に居る是も研究の一である。

菊を作るのも丁度政治を取ると同樣、總て法に協ふ樣にせねば不可んもので、私は短氣だが菊の爲めに大變心が和んだと思ふ、ヤタラ怒つた時に菊へ手を入れて御覽なさい、無理があるからして、ポキ〳〵折てしやうがない、天下の政事を見るにも、腹立しい時なぞは屹度無理の遣りかたをするから、反對者も出來るのでせう、ツマリ菊を作るも自然政事を見る樣に、總てが法に適ひ、順序を履まねば往きますまいと思ふ。

# 吉田要作君

## 夜會の經歷

外務大臣が夜會を始めたのは明治十二三年頃濱の延遼館で天長節の時に催したのが嚆矢であります其時分には中々舞踏や假裝舞などを遣ると云ふ程のものではない、只政府部内の役人とか各國の代表者とか云ふ人を集めて夜會を遣つたのです丁度今日の集合の樣なもので其當時は寺島さんが外務卿の時分であつて在野の人では澁澤さん位の所が這入つて居つたのみで重に其時分は政府部内の人の方が多うございました。

夫から井上伯が外務卿の時分外務卿の官舎で夜會を天長節の時に開いたことがある、此外務卿の官舎は左樣廣くございませぬから先づ其時分の客は五百人位を限つて招いて居つた所が五百人を限つても漸く三百人位しか參りませぬでした、が夫でも外務卿の官舎は一杯になつた有樣でした、夫から鹿鳴館が出來て以來は外務大臣の夜會は始終同館ですることになりましたが大に場所が廣いのですから官途の人計りでなく在野の紳士も可成澤山招く樣になりまして大抵一千人以上一千五六百人計の人が集つて今日の紳士と云はれる人は大抵這入つて居りまして新聞社の社長なども招ぎました明治二十三年頃から鹿鳴館が外務省の管轄を離れて宮內省に屬することになり夫から又華族會館となつて仕舞ひ同時に帝國ホテルが出來ましたから夫から後は帝國ホテルを借りて夜會を開く樣になつた、夫から明治二十三年から國會が開かれ貴衆兩院の議員が出來て是がマア三百人宛にしても都合六百人と云ふものを招くことになりまして、今では大變な數になりましたが夫が爲めに是まで朝の人は高等官五等位の人迄を招いて居つたものを止めまして局長とか一ケ所の長に限つて招くことになりまして他の高等官などは已を得ず招がない樣になりました、昨年も左樣です、今度はマア大抵招狀を發したのは凡そ一千五百人ばかりで其中外國人が四百人ばかりあります、鳥渡夜會の初からの經歷を云つて見ればこんなものです。

## 夜會の服裝

男子の服裝は餘程前から燕尾服と云ふものを夜會其他晩餐會には着て來ることに極つて居りました婦人の服は一時洋服が流行つて日本の婦人が洋服を着て夜會に見えたことがありましたが、夫は一時の流行で今日では日本の婦人の着物を見るに洋服よりは日本の服で來るものが多くなりました、外務大臣が案内を致しまするに男子は燕尾服、婦人は先づ白襟紋附或は洋服なれば通例のロッブ、デルコルテ―即ち夜會服を着て來るやうにと注意してありますのは殊更に主人の爲に敬禮を盡せと云ふのではなく、當日は皇族も御臨席になり外國の公使とか貴紳も夫々禮服を着て見える所から日本人が甚だ不作



法な着物を着て來られては交際上からも体裁上からも困りますからです、昔は能く御客の中で燕尾服を着て來ずフロックコートを着て來た人があつたのです、サウ云ふ人は外務省では仕方がないから入場を謝絶致しました、『ドウか皇族方も御出でのことゆゑ甚だ不都合であるから着物を着替へて御出でなさい』と云ふて已むを得ず謝絶致しましたこともあります、近來は餘程サウ云ふことに熟練れて來ましたからサウ云ふ人は大分少くなりましたのは追々交際のことなどを多くの人が知つて來た結果だらうと思ひます、それから又中には燕尾服を着て黒の襟緒を掛けて來る人がありますが、それだけのことで折角遠方から來たものを謝絶するのは氣の毒であるから外務省で

は幾筋も白の襟緒を用意して置いてサウ云ふ人に用立てゝ取替へて貰ふと云ふ位まで注意して居ります。

夫から手袋……燕尾服に白の襟緒と白の手袋といふものは必ず附屬物になつて居る、夫で手袋の方は箙めて來ても良し其模樣に依つて左の手に握つて居つても宜い、禮式の道具の一であるから是非なければなりませぬ、燕尾服を着て縞や色の着いた手袋を箙めて來るのは非常に可笑い。

靴は中には熟れて塗靴を穿いて來る人もありますが隨分サウでない人も多い樣である、又舞踏に用ゆる靴は自から極つて居る、踵の高い靴とか裏皮の厚い靴とか云ふものは勿論穿かないが宜しいシルクハット、は今私の聽く所では歐羅巴では彼の夜會帽子と稱けて疊める帽子がございまする、シルクハットと云ふのは例の高い絹の絲で出來て黑い光のあるものである、夫で夜會帽子は疊める帽子で座敷の中に持つて這入る帽子であります、元來帽子と手袋とを持つたなりに座敷の中に這入つて來るのが禮式でありますが近來は非常に邪魔になるから歐羅巴では疊める帽子と雖も座敷の中に持つて這入るのは流行しないと云ふことを私は聞きました、兄や高い帽子シルクハットを持つて天長節の如き大夜會の席に持つて往くのは本人の邪魔になるのみならず他の人の邪魔にもなり、甚だ困る所があらうと思ひます、斯う云ふ場合にはシルクハットを被つて來たなれば入口

の外套などを預かる人の所へ渡して預けて置く方が宜からうと思ひます。

ソコデ先年帝國ホテルで外務大臣が夜會をした時分に誰れであつたか知らぬが客の中に高い帽子即ちシルクハットを手にして這入つて來た、其人は禮式を守る積で帽子を手にして這入つて來たのでありませうが、立食の時に至つて已を得ず右の手も左の手も食事の方に使はなければならぬ夫で帽子の置所に窮したものと見えて自分で客間の座敷の方へ持つて往つた所此處にも客が一杯居て置場所がないので、已を得ず帽子を頭に載せて被つたなり立食場に往つて食事をして居た、所が多くの人が目を注けて、主人の側に居る我々は勿論



大きに困りました。

## 馬車の客と人力車の客

今度は帝國ホテルの入口は馬車で來る客ばかりにして、人力車で來る客は山下門の土手の方にある門の入口から這入つて貰ふ積である、ドウも此馬車で來る人と人力車で來る人と區別して置けば危くないのです、夫であるから人力車の方は已を得ず横の方から願はなければならぬ、人力車で來る客には失禮の樣に當るかも知らぬが是は別けて置いた方が危險も少なし混雜もしないと云ふ精神です。

## 場所の割當

會場の裏の方には大きく假屋を作つて一般の食堂に當て、夫から

帝國ホテルの通常の食堂にして居る所は例年の通り舞踏場と定めて、ホテルの入口より右の方に當る各室を以て皇族大臣各國の代表者と云ふ樣な人の休憩場或は立食場に當て、一般の來客の人には館の左の方の各室及假屋の食堂を以て當てる積りである。

## 舞踏場の心得

御承知の通り舞踏には豫て番組と云ふものを拵へて小さな骨牌に鉛筆の附いたものに舞踏の番組が印刷してあるものを澤山入口に備へて置いて踊を踊る者に限つて夫を上げると云ふのでサウして踊る人は其番組を以て婦人と豫て前から約束をして置くものです譬へば第一にカドリユーには私は貴女と一緒に舞踏を致したいから御承諾下



さいと云ふて男子の方から婦人の方に相談をすると其婦人は他と約束がなければ承諾をします、サウすると其婦人の名前を書いて置くカドリユーの時には何處其處の婦人と遣ると云ふことを書いて置く、又第二にランシエを踊るに付て貴女と踊りませうとか貴女と踊ることを御約束したいと云ふことを申入れて婦人が承諾をすれば又夫へ書いて間違のない樣のために出來て居るプログラムです踊人は毎年大抵西洋人が重なのです、又西洋の若い婦人などは毎年交際の期節に當つて舞踏を遣るのを何より樂みにして居る位です、踊場で踊を見物する人と云ふものは、毎年非常の人で踊場に這入つて見物をする時には、後にある人は能く見へないから椅子に上つたり、或は盆栽

の上に登つて見る人がある是等は實に外國人に對して不体裁の譯なんです、サウして居る位であるから踊場は非常に狹くつてサウして踊る人は自由に踊ることが出來ないことがあるので大に掛りのものが困るのです、又中に日本の皇族の居つしやる時に皇族の前へ遠慮もなく立つたりなどする人がある、日本の人は日本の皇族を知つて居るからサウ云ふことはないが外國の人は能く知らないから無理はないがヤ、そう云ふことがある何んにも知ない人は皇族の前に立たりして毎年掛員が注意をしまする、日本の人は皇族と見れば殊更に敬禮をしまするから外國人は傍らに皇族が居つしやれば夫に氣が附いて敬禮を致しまする、詰り日本人が皇族として能く氣を附ければ



外國人は日本人を見て自ら其人に敬禮をしまするから一般の皇族に對して無禮のない樣になる。

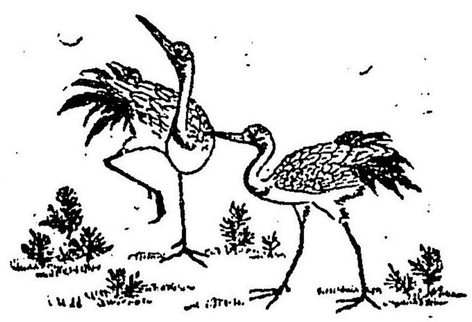
## 立食場の心得

夫から立食場はドウしても當年位食堂を廣くしても大抵又此方で食堂の限り……制限もあるから只大きくさへすれば能いと云ふ譯にはいかない外務省の方では出來る限り大きく食堂を作つて來客の人々に十分の食事の出來る樣に注意するために昨年からして始て假屋を後の方に設けるやうに致したのです、當年も昨年の例に倣つて假屋を作りましたけれども一時にドウも其處へドカ〳〵と這入つては困るがドウしても混雜は免かれませぬソコデ御客の方で一杯になつ

て居ると見れば少し待つて漸々に食堂の減るに從つて這入つて貰ふようにしますれば、食堂の秩序が能く立つて又立食する人も綾り立食が出來ますからサウ云ふ樣にして貰ひたいものです、外務省では今度は此ポンチ、シャンパン其他ラムネだとか、ソウダとか、ジロップだとか茶コーヒーなどを用意して置きますが立食場には最も舞蹈をする人のために廊下の邊に茶或はコーヒーとかいふ飲料を置きます、夫から舘の左の方に吸煙室を設けて置きますから其處へ往つて吸煙をして貰ひたい。

要するに日本人でもチヤント行儀の好い人は外國人に對しても矢張り立派に行儀が好い、行儀の好い人は外國人の前に出ても笑はれる樣なことはない何れの國でも矢張り善いことは善い惡いことは惡いと云ふのは自然の道理であると思ひます。





# 藤波言忠子

## 御料牧場の現狀

御料牧場は北海道の新冠にあります、するのが三万八千町歩で、馬が二千頭餘りあります、する、夫は乘馬と馬車馬とを多く繁殖させまするので、帝室に於て御買上になりましたものは競賣に附しまする、サウシテ夫は日高の馬市會社と云ふものがありまして、それが受賣を致しまするので、一ヶ年三百頭から四百頭許りであります、此新冠の經濟は獨立經營になつて居りまして事業の收入を以て一切の支出を辨じます、夫から千葉縣下の下總御料牧場、是は三



千五百町歩餘りあります、其所には五百頭程の馬がある、夫から牛が百五十頭乃至二百頭、羊が千六百頭許り居りまするが、是等の事業も矢張り御料の爲であります、馬は宮内省主馬寮に買上になり餘りは人民に拂下る近來は市場を開ひて拂下馬を競賣に附しまする、牛も亦た帝室の爲めに飼養するので即ち御料牛乳を作る目的であります、馬は乘馬と馬車馬と農用種と貨車用種とを作る目的である、羊はメリノーと云ふ種類とサウスダウンの兩種類で是は毛を採る目的で皆千住製絨所に賣拂ひます。

ドウモ金華山だの友鶴と云ふような名馬は滅多に出ませぬ、併し是から是非御料牧場で產出したる良馬を御料馬に差上たき目的です、

唯今では皇太子殿下の御料の弦月と云ふ馬、是は新冠御料牧場の産で雜種です、此馬の殿下の御料になりましたのは喜ばしきことであります、又馬車馬の方は宮内省で使用して居るのは大抵御料牧場で出來たものであります。

夫からモウ一ツ牧場がある、夫は岩手縣下の外山御料牧場で、此處では乘川と馬車用の馬を主として作つて居りまする、又牛も飼ふて居りまする、此外山御料牧場と云ふのは盛岡を距ること六里、山の中で海面を拔くこと二千呎以上の處でありまする、餘程寒い所です、其處には馬が二百頭牛が五十頭程ありまする、追々是は殖す見込です、町歩は一万五百町歩ありまする、夫から以上三牧場とも傍ら殖



林をやつて居りまして良材を繁殖させる考へであります。

## 下總の牧場

夫で此牧場と云ふものには歴史がありまして、下總の牧場は明治四年に大久保内務卿が開いたもので、當初は中々金の掛つた事業でありましたけれども、收支償ふてやる目的でなく、眞に日本の農事の改良、家畜の改良、西洋風の遣り方と云ふものゝ模範として遣つたので、經濟如何は問はなかつたものですが、夫が帝室の有に歸してからは丸つきり經濟を度外に置く譯には往きませぬから、其經濟の點は私が職に當つて責任を帶びて遣つたのです、今日の所では未だ裕ではありませぬけれども不足する樣なことは決してありませ

ぬ、ト云ふて帝室の御事業の事ですから利益許りに走らぬ積であります。

## 馬の種類

さて普通乘馬と馬車馬とは馬の骨格なり性質なりそれ〴〵違ひがあります、乘馬は美貌を貴び又感性がなければならぬ馬車馬になりましては固より美貌は望むところでありますが、感性は左程要らぬ穩當にして挽く力が強くなければならぬ、夫から貨車用になりますると感性は要らなくなる、忍耐力が強くして挽く力が非常にあれば宜しい、故に乘用馬なり馬車馬なり農用馬なり貨車馬なり皆それ〴〵特質を持つて居る。



夫から此貨車用と云ふのは、鐵道と海との連絡、市場と停車場との連絡を通ずる運搬用に用ゆる、是が中々大したものです、馬車用のものに二倍位の力を持つて居る種類です、今日馬の改良を計る目的は何かと云へば詰り軍用なり農用なり商工用なり夫れ〴〵其用に依りて充分の働きを爲すに足るべき馬を作り出すことである、然るに如斯く馬には乘用、馬車用、農用、貨車用の四種類あるにも拘はらず、只馬を改良すると云ふても出來るものではない、四種類の特質に依りて各々改良發達を計つて往かなければならぬマサカ鹿兒島の馬を以て來て貨車用馬にも出來ませぬ、又仙臺の鬼首を持つて來て貨車用にも出來ない、即ち其特性々々によりて其改良を計らなけ

れば決して効を收むることは出來ない。

## 乘馬術

乘馬術に就ては、未だ日本には西洋の樣に乘馬學校と云ふ樣なものもなく稽古をするのにも甚だ困りまする、夫で先づ日本の東京で云へば小石川に一人山島先生と云ふのがありまする、此間歿なりました目賀田雅周と云ふ人も幾分か是まで人にも敎へましたが西洋の如く一の乘馬學校でレッソン的に敎へるのではない、爲めに乘馬術を習ふと云ふのには甚だ不便を感ずるのです、けれども山島と云ふ人は人の依頼に應じて廣く馬の取扱方より乘法と云ふものを敎へて居りまする、又目賀田は死去しましたけれども若手の先生に根村と云



ふ人がありまする、此人は帝室の調馬師ですが餘暇があれば人に敎へまする、其外學術と經驗とを積みたる騎兵の士官中にも敎へる人がありましよふ、此人達が乘馬學校を開いて一般の人の望みに應じて敎へる樣になつたならば大に便利であらうと考へまする。

日本從來の調子乘是は追つけ廢なるのであらうと私は思ふ、是は大坪本流と云ふ昔の乘方です、カウ云ふものをドウカして存して置きたいものです、ナゼ存して置きたいかと云ふに、是は日本特有の馬術であるし、且馬を仕込むと云ふことに就て餘程利益がある、今日では慰みものゝ乘方ではありますが斯樣な利益があるから是非存して置きたい考へである、それで主馬寮に於ては猶ほこの調子乘と云

ふものが存してあります、歐羅巴にも能く斯樣な例があることでありますが、日本でも一時は婦人が馬に乘つたものです、無論西洋風の乘方ですが、婦人は婦人として乘れる樣に横に乘るのです、婦人の乘馬は今日では微々たるものなれども決して廢ることなく將來追々發達するであらうと考へる、斯く馬は益す其需要を增し國家の爲めに益す必要の動物となりまする故に、世の中の人も國家に必要なる此馬を愛すると云ふ念慮を起す樣にしたい、彼の九段坂を馬が山の如き重荷を挽きて上り往く有樣を見ると、實に人々が未だ馬を愛する念慮に乏しくして苛酷の使役をして居ることが分かる、是は漸々改良して馬相當の力に應じて荷物を運ばせ使役の時間をも適當の



度に止める樣にしたい是にはドウしても農科大學の獸醫學の先生達や世の中の學問のある人々が動物の使彼の度と云ふものを能く分るやうに說き明かし一般の慈善心を呼び起して動物を愛するやうに導みて貰ひたいと思ひます、尙ほ牧畜の事に付きましては吾々同志の者牧畜研究會なるものを設け、其機關としまして毎月一回牧畜雜誌を發行して居りまするが、牧畜の事を知らんと欲する人々は此雜誌を視れば牧畜上の種々の智識並に吾邦牧畜界の時々の消息を知る便となりましよう。

# 山縣有朋侯

## 槍術

私が槍を始めたのは十六歳の頃であつた。今より四十何年と云ふ昔のことである、藩の槍術家には寶藏院流のものが二家、佐分利流のものが三四家あつたと思ふ、それに奇兵隊には弓隊と云ふものもあり、槍隊もあり又銃隊と云ふものもあつた、此寶藏院流と云ふのは一丈の十文字槍で子、其頃藩に岡部右門と云ふ人の子息に岡部半藏と云ふ人があつた、是は中々槍を上手に遣つたもので此間迄生存へて居つたが、ッィ此二三年跡に亡くなつた、それと井上品之助、此



二人が先づ長州では槍に懸けては擢出て居つた、此岡部半藏と云ふのは會藩の志賀小太郎と云ふ近世の槍の名人に就て學んだものである、此會津の志賀のことは藤田東湖の書いた常陸帶と云ふものに志賀小太郎は槍術の名人であると云ふことが載つて居る、全く藩の岡部半藏は志賀に就て槍を學んでそれから九州邊を修業して歩行きよつた、當時九州は武道は最も熾であつて久留米、柳川藩邊りでは二間柄の長槍を遣ふものが澤山居つたが、岡部は到る所叩付けたものと見へるヲ、それで關東或は三河、越前、伊勢などから内弟子に來て居つたものが澤山あつた當時岡部半藏と云へは今小太郎と云はれた位で豪い勢であつた。

元龜天正の頃には長柄備と云ふものがあつて槍隊を立つて今の演習見た樣なものを年に二度位は遣つたものと見へる、其頃は一騎討の流行つた時分ぢやからノ、それで隊などでは「槍は叩くべし」と云ふて横から叩き落すが一番早い、一人と一人とでは叩落すことは六つかしいが數十人隊を立つて遣るとどうしても働の好い人は二人や三人の槍は叩落して仕舞からぢ、固よりそれは古い話で今は役に立つものではないが何にしても能く研究はしたものと見へる。

騎兵隊の槍隊と云ふものは林半七(子爵林友幸氏)が隊長を遣つて居つた、彼の人は熱心のものだ今でも遣つて居るさうだ、始終朝シゴクを遣つて居る、私も近來少し計り身體の爲めに醫者が好いと云ふからぢ、遣るがどうも身體の工合は好い樣な胸部を披らくと見えてぢ。



西洋の武器には騎兵が持つて居る槍は實用に供するものと見える、併し騎兵は槍で突殺すよりは馬で蹴飛す方が本來の任務ぢやからぢ、アア近來は劍を振り廻して乘込むと云ふ風に爲つて居る。

凡て藝術と云ふものは六十以上に爲つては身體の運びと云ふものが……屈伸が自由にならぬで旨くいかぬヨ、そこに至ると槍も劍術も一向變らない打つ突くともに同じことぢや、竹刀なら竹刀槍なら槍で來るとか遣るとか打つとか突くと云ふことは此眼と手と足と身體がチヤンと一樣に行かなくちや、迚ても旨くいけるものぢやない、

年を取るといけぬ、眼丈けは殘つて居るが此所から來るとか此所から遣るとか云ふことは見へても身體が利かぬものぢやから此所を打つぞやと思ふたのではモー間に合はぬ、そこは術だから唯突き合ふ計りぢやいけぬ、餘程熟練しないと……。

## 柔術

私が柔術を遣る時分には相方互角の人間が取つたり組んだりして居る内に締合ふ、締合ふ内に落ちて仕舞ふ、モー參ると云ふて手で叩く内には落ちて仕舞ふ、そんなことは私共も幾度も遣られた、「締合ふて居る機みに息を止めて仕舞ふことが能くあつた。

## 劍と槍



劍術は將來に於ても望はあるが槍は自然絶へて仕舞ふであらう、警視廳の刑事巡査中には劍術を遣ふ者はあるが、槍はさう見へないは兎も角昔の武藝者と云ふものは今の若い人の遣るのと精神の入れ所が違ふて居るからどうしても甲乙がある、渡邊（昇子）などは木戸の世話に爲つて齋藤（彌九郎）の塾に這入つて居つたが中々熱心のものぢやつた劍術はどうも關東ぢやアマア齋藤、千葉、桃井と云ふ大家があつたからノ、其頃の他流仕合などを見ると回向院の相撲を觀る樣なものぢやない、冷汗が出ることが度び〳〵あつたものだ。

## 謠曲

謠は嗜好で實生の家元が折節は遣つて來ますが大きな聲をすると肺

に悪るいとか氣管に障ると云はれるので細い聲で遣つて居る、觀世は入り易い樣な氣味はあるが其蘊奥に到つては何流も變らない六つかしいものサ、何を云ふても秀吉の時代には皷を打つものも太鼓を叩くものも卅万石、五十万石の大名が遣つたのだからどんな藝でも出來る譯サ、長州、藝州では喜多流が流行つたものだ。侯の談話は益す進んで佳境に入らむとするとき、給仕は福島大佐の來訪を報じぬ是に於て侯は身を起して「又にしやう」と一揖して階上に登られぬ。



# 渡邊國武子

## 蝦蟇が池

此邸は元山崎主税助と云ふ幕府の交代寄合で御一新後子爵か何かに爲つた人が持つて居つたものである、昔から此池に大きな蝦蟇が棲んで居ると云ふて蝦蟇池と云ふた、是は江戸名所圖繪などにも出て居る、アノ池の島に辨天があつたさうだが山崎の領地に在る辨財天の出店の樣なものだらう、所が此池の水は大層火焦に能效くさうである、どう云ふ譯でそんな風説を付けたものかと云ふと、此近所は明和の大火のとき大槲燒けて仕舞つたが獨り此山崎の邸が一軒殘つ

たさうだ、それで坊間では『是は辨天さんの御利益に依るものだと
か水がある爲めだ』とか云ふて一年に一度開帳があると大變參詣が
あつたものださうだ、何にしても今でも蝦蟇の居ることはエライも
のだ、是迄の主人は大きな蝦蟇が居ると云ふ言傳の實否を試めさむ
ため、池の水を浚へさせたことがあつたがどうしても浚へ切れなか
つたさうだ、春先になると蝦蟇が孳尾してギウ〳〵云ふ聲はこゝ迄
聽へる、それで黒い海苔の樣な鮭の卵みた樣なものを産むと池が一
面眞黒になる、それが孵つて蛙と爲る、段々聞く所に依ると彼のヌ
ラ〳〵したものは全く火焦に效驗があるさうだ、多分それで此池の
水を付けると火焦に利くとか火伏に爲るとか云ふのであらう昔は彼



の杉林の向が御殿でこゝは締切つてあつたさうだが夜中に仲間など
が拍子木を擊つて來ると能く遣られたことがあつたさうだ、多分空
氣にでも打たれたのであらうが、兎に角本村の妖怪屋敷と云つて有
名なものになつた、併し今ではコンナ大妖怪が來たから小妖怪は逃
げて仕舞つて姿を見せぬ、ナニ魚が居りますか……居るとも鮒や鰻
鯰などは自然に生じて澤山居る、今年は鯉を澤山放しました、始め
私は屋敷を買ふときには成る丈け高臺で水の好いところをと云ふ注
文をして置いたら此邸が賣物に出た、自分で見には來なかつたが
『宜からう』と云つて買受けた、其時分の建物は是ばかりで別に何
もなかつた、我輩は百兩も掛けたら住へるだらうと云ふた位だから

規模は小さいものさ、それで先年アノ池の向ふに離を建てましたが、紅葉の季節には一番趣味を添へて面白い、總坪は七千坪もあらう、最初安場(保和)の話に『私も一邊此邸を買はうと思つたことがあつたが家内がアレは山崎の化物屋敷の跡だから止して呉れ』と云ふので見合にしたと云ふ話があつた、こゝは町の人家に近いがアッチの離れの方に行くと殆んど別世界の樣で前に池があり裏に山があつて夏などはモウ彼の門口を這入るとズット涼しくなる是は樹木や水があるからであらう。

## 運動と音樂

ドウも斯う肥滿して困るので毎日運動を遣つたり體操を遣つて居るが此節の雨では遣らぬで閉口して居るので笛だの尺八は好きで能く遣つて居ります、私の長屋に琴を彈く女があるので三曲を合せて遣らせて見ると一番尺八が音頭取りに爲る尺八には本曲と云ふものが三十六曲あつて中々清冷絶妙のものであるが合はせものがなければ趣味が少くない、胡弓も中々好い音のもので此間はバイオリンと合せて遣つて見たが稍や彼れに類似して居る、アイツをモウ少し改良したなら餘程面白いものに爲らうと思ふ。

## 各人の嗜好

古市などは謠曲に掛けては中々本物だね、此の間鳥渡聞たが段々エライ話が出て來る山縣侯の槍と來ては實に天禀ぢや嘗て東宮殿下の

御前で遣る所を見たが實に旨いものぢや、併し山縣さんは昨今は槍よりは實生流の謠や演劇の方が宜しからう、渡邊の（昇）武者修業も面白いね、私は嘗て『渡邊は檢査院長よりは詩が上手で詩よりは又俳諧が上手、俳諧よりは劍術が上手である』と云つたことがある、それから大分茶の話が見えたが茶に掛けては京都が歴史的に傳つて來て居るので土京邊りの舊家の旦那と云ふやつには中々エライものがあるそうだ、時に話は變るが山尾（庸三子）と云ふ人の金魚、是は意外だつたね。

## 象山の嗣

私の青年時代は象山が幽囚されて居つたときであるどうも象山と松



代藩君臣との關係は圓滑でなく御一新後も惡るく云ふものがある位で眞田家では一向用ゐられなかつた、夫故に象山の嗣は息子の佐久間覺と云ふものがあつて其娘に佐久間清と云ふ養子をしたが誰も搆手がないから私が大藏省に居るとき十二圓計の役人にして遣つたことがあるが其後どうなつたか一向便が無い。

名士の嗜好　終

明治三十三年一月二十八日印刷
明治三十三年三月廿二日發行

定價金廿五錢

編輯者　東京神田區仲猿樂町十六番地　中央新聞社
發行者　東京神田區美土代町二丁目一番地　大橋省吾
印刷者　東京神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎
印刷所　東京神田區仲猿樂町十六番地　三光社
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　文武堂
發賣元　東京神田區表神保町　東京堂
　　東京神田區表神保町　文博館
大賣捌所　大阪東區備後町　盛文館

不許複製

再版

御前名譽講談

松林伯圓講演（武内桂舟君畫）

中山大納言

全壹冊上製　正價金廿五錢　郵稅四錢

寛政年間太上尊號の事公武の間に軋轢を生じ、爲に議奏中山大納言關東に下向し、老中松平越中守と殿中に對見し、談論數回屢々幕吏を震慄せしめたる快絶史談は、世に隱れなき偉蹟也。今松林伯圓得意の雄辯を揮ふて之を講演す曾て皇太子殿下の沼津御用邸に召されし中山の御前に於て尊聽に達したる者二位御局の即ち是れなり

發兌元　文武堂

福地櫻癡先生作　水野年方君口繪

# 山陰麒麟

全壹冊袖珍美本
總クロース
正價金二十五錢
郵稅四錢

附錄　文覺上人橋供養

（再版）

帝國文學評　山陰麒麟とは主人公山中鹿之助の漢譯にて即ち尼子末路の勇士幸盛が逸傳を敘せるもの、附錄橋供養は即ち文覺袈裟の物語合して三百五十餘頁の一冊子、居士近來漸く志を脚本に得ざるまゝ昔取りたるきねづか稗史家と出かけたまへる（中略）閑話休題、相變らずツ〳〵書きにもすら〳〵としたる筆廻りは、明治文章家の資格は未だ動くまじく近來の好書なり。





再版

中央新聞記者　水田南陽君譯（武內桂舟君畫）

# 魔法醫者

全一冊上製　正價金廿五錢　郵稅四錢

雲山萬里の異域に流涙する兄が、日本に在る妹に向つて、一片思想の情より懺悔する秘密の不思議は、こゝに『魔法醫者』となりて、幻怪奇異の事歷を演じ來る。請ふ長夜燈下の伴侶となし給へ。

再版

發兌元　文武堂

再版

袖珍總クロース金字入美本

巖谷漣山人
川田河山人
黑田湖山人　共譯（寫眞版數葉入　中村不折君畫）

# 少年小說　乞食王子

全一冊上製　正價卅五錢　郵稅六錢

王子に肖し乞食小僧に肖し王子、相繋がりて變幻不可思議の物語を成す。是れ米國の滑稽家マク、トヰン氏の原作を譯せしものにして、誠に奇々妙々の快文字、讀むで厭くを知らざる可し。

發兌元　文武堂



英國海軍大尉エム、リード氏原著
日本櫻井鷗村君補譯　中村不折君口繪

# 勇少年冒險譚　初航海

全壹冊袖珍美本
總クロース
正價金二十五錢
郵稅四錢

（三版）

（一）家を出づ（二）船中の苦（三）ペン、ブレース（四）檣上の亂打（五）海中に落つ（六）水夫の修業（七）奴隸貿易船（八）脫船の密議（九）英國巡洋艦（十）黑人の王樣（十一）和蘭の最後（十二）獵に赴く（十三）獅子と戰ふ（十四）荒野に迷ふ（十五）人間の干物（十六）狒々の襲來（十七）奴隸の積込（十八）王の懇望（十九）鰐魚の難（廿）軍艦の來攻（廿一）飲水の缺乏（廿二）船火事（廿三）火藥の在處（廿四）奴隸解散（廿五）四面の大敵（廿六）洋中に漂ふ（廿七）慘殺の言渡（廿八）危機一髮……以上

## 家庭婦女必讀龜鑑

讀賣新聞記者 鈴木光次郎君編（第六版出來）

# 明治閨秀美譚

全壹冊袖珍　正價金拾貳錢　郵稅四錢

浸潤膚受の力は、實に驚く可きものありて存す。古來哲人傑士の、其母より受る感化の大なるは、史傳之を示して炳焉たり。婦人は實に社會の潜勢力、賢母良妻の國家に稗補する所誠に測る可らざるものなり。本書は明治閨秀の言行實錄にして、實に社會の龜鑑たり

發兌元　文武堂



訂正十一版

# 明治豪傑譚

文學士　高田早苗君序文　破天荒齋松平康國君序文
如不及齋市島謙吉君序文　讀賣新聞記者鈴木君編纂

全壹冊洋裝袖珍本
賣價金廿五錢
郵稅六錢

孤劍世海の幾波瀾を凌倒し風雪を呼び雷霆を呵し能く驚天動地の偉業を立つ是れ維新前後の英傑の士か國事に鞠躬して偉大の革命を遂げりし所以なり其間傑士の性行閲歷尋常ならざるもの太だ多し其奇談異蹟彌よ出で彌よ多く殆ど無限の趣味あり今之を網羅して更に潤飾を加へ鮮明美麗の好冊子として閲讀に便にす、世上の君子一たび繙かば古傑士の音容に親炙するが如く殆んど食を忘れて陶然たる所あるべし。

發兌元　文武堂

74758

# 東西廿四傑

## 全壹册袖珍美本

●源朝為要
○ハンニバル
●秦始皇
○シーザル
●山田長政
○コロムブス
●項羽
○加藤清正
●彼得大帝
○大石良雄
●プリードリヒ大王
○郎功成

目次

○クシントン
●木戸松菊
○鐵木眞
●チルソン
○新田義貞
●北條早雲
○唐太宗
●ガリバルヂー
○李鴻章
●モルトケ將軍
○水村重成
●ジャンダーク

正價金二拾五錢郵稅六錢(再版)

發兌元 東京神田區 文武堂

29
169
Ⓜ

005092−000−8

29−169

# 名士の嗜好

中央新聞社／編

M33

ACE−1893